始

大正
7. 12. 11
内交

325-320

序

幽靈の正體見たり枯尾花、唐天竺から渡來したと云つて、威張り臭つてゐる佛樣も、一皮ひんむけば、ねつから豪くも有り難くもない、顏が三つあつて手が六本あつたり象頭人體だと云ふのやら、形のない屁のやうなのやら、それは〳〵二目とは見られたものでは無い。

中には神樣とも佛樣とも、分の分らない、得體の知れないのもある、弘法大師だの役の小角だのが、寄つてたかつて拵へたのが、何時の間にやら、天竺から來たやうな顏をして納まつてゐる、そいつをまた、御燈明をあげて、御念佛申して、嬉しがつて信仰してゐる人も日本には澤山ある。

さう云ふ佛樣を、用捨もなく御目通へ控へさせての棚下し、アラ探し、訊いて吃驚見て仰天、讀んで呆れて目をまあさぬやう、御用心あつて御覽下さるべし、面白いことは受合だとお釋迦樣が仰有つた。

著者識

佛樣の素行調査

目次

佛樣の總まくり……一
一、閻魔大王……七
二、地藏菩薩……一五
三、釋迦如來……一九
四、阿彌陀如來……四〇
五、不動明王……五一
六、大辨財天……五六

目次

七、觀世音菩薩……六〇
八、庚申樣……六四
九、大黑天……六八
一〇、聖天樣……七二
一一、達磨大師……七四
一二、帝釋天……七九
一三、摩利支天……八一
一四、布袋和尚……八三
一五、阿修羅王……八五
一六、文珠菩薩……八七

目次

一七、十六羅漢と五百羅漢……八九
一八、牛頭天王……九一
一九、虛空藏菩薩……九三
二〇、倶利迦羅明王……九五
二一、普賢菩薩……九七
二二、日天子……一〇〇
二三、月天子……一〇一
二四、金剛夜叉王……一〇三
二五、吉祥天女……一〇六
二六、醫王藥師如來……一一〇

目次

二七、阿羅邏仙人……一一四
二八、耆婆……一一六
二九、訶梨帝菩薩と鬼子母神……一一八
三〇、阿難尊者……一三〇
三一、金毘羅樣……一三六
三二、三寶荒神……一三八
三三、金伽羅と制吒迦……一四二
三四、月蓋長者……一四七
三五、須達長者……一五〇
三六、彌勒菩薩……一五九
三七、四天王……一六六
三八、北斗菩薩と妙見菩薩……一七〇
三九、十大弟子……一七一
四〇、摩耶夫人……一八三
四一、上行菩薩……一九〇
四二、大自在天……一九三
四三、大日如來……一九五
四四、多寶如來……一九七
四五、寒山と拾得……一九九
四六、大梵天……二〇一

四七、維摩居士……二〇三
四八、善無畏三藏……二〇五
四九、韋駄天……二〇八
五〇、提婆達多と提婆菩薩……二一〇
五一、龍樹菩薩……二一六
五二、藥王菩薩と藥上菩薩……二一九
五三、傅大士……二二一
五四、妙音菩薩……二二三
五五、傳燈大師……二二六
五六、弘法大師……二二四

五七、法然上人……二五一
五八、親鸞上人……二五八
五九、道玄師禪……二七一
六〇、日蓮聖人……二七九
六一、一休和尚……二九九

佛様の素行調査目次　終

佛様の素行調査

文學士　木村淨圓著

佛様の總まくり

長州の志士で、維新の際には、今の山縣や伊藤井上などから較べると、ずつと豪かつた高杉東行、久坂玄瑞と云ふ連中などよりも、もつと豪かつた村田清風と云ふ豪傑が、江戸へ出て來るとき富士山を見て、

來て見れば聞くより低し富士の山

釋迦や孔子も斯やあるらむ

と云ふ一首の歌を詠んだのは、人のよく知てゐる所だ。

世の中は、みんな斯したものさ、來て見れば聞くより低しさ、富士山は高い、立派な山だと噂に聞いて來たが、實際見ればそれ程では無い　お釈迦様でも孔子様でも、豪さうな顔ばしてゐても、それは何千年も昔の、おまけに印度だの支那だのと云ふ海の彼方の異國のことだもの、何が何だか分りやしない、誰も行つて見て來たことも話をきいて來たものも無いのが、お釈迦様や孔子様の幸福といふものさ。

早い話が、日本に於ける最初の政黨内閣を組織して、平民内閣だの庶民政治だのと此許御手拍子御喝采の盛んな大政黨の御大將、内閣總理大臣と世に時めく正三位勳一等原敬といふ豪い方でも、その私宅にゐては勝手元へのこ〳〵と出て來て、

『男は勝手元へなぞ顔を出すもんぢやありませんよ』

と、奥方淺子夫人から一喝されて、グウの音も出ないで首を縮めて奥へ引籠んだとあるからには、さすがの白頭總裁も、一婦人の淺子さんよりは豪くないと云ふことにもなるのだ。

幽靈の正體見たり枯尾花さ、昔は恐ろしかつた雷公も、今ぢや電信だ電燈だといつて人間があべこべに利用をする世の中だ、原さんだつて、文明の時代に生れず新聞とか何とかいふものゝない時代だつたらば、それこそ平民で内閣を組織したのだから、絶世の英雄のやうに取沙汰されやうのに、斯うして奥方に叱られたことまで手に取るやうに國内に知れ渡る新聞といふ重寶なものゝある時代に生れたのが御氣の毒様と言へば言はれる。

やれ活佛だの、御門跡だのと尊敬をうけて、善男善女は、その身體の垢を燒いて粉にして萬病の藥にもしかねない何所やらの法主樣が、藝者狂ひ妾沙汰も今日や昨日の話ではない。衆生濟度の結願は、そこに一點の私心があつてはならぬ筈の、そんじよそこらの御宗旨の大本山や總本山で、管長爭ひ役員の奪ひ合ひ騷ぎ、新聞記者の筆にかゝつて、苦々しくも淺ましい醜狀を曝したことも一度や二度、二個所や三個所の沙汰ではなかつた。

數へあげれば際限はないが、一枚の紙にもうらおもてはある、佛樣だつて坊主だつて、四角ばつて儀式ばつて、御經と首つ引をして念佛三昧で行ひ濟してゐるばかりでは堪らない、裏へまわれば、內々は酒も飲みたい、女も欲しいのは無理はない、ゆつくり寬ぎたいこともあるだらうから、末世の僧の破戒無法の行爲を攻めるのぢや無い

昔だつて隨分破戒無法の僧が多かつたのであらうが、そこがそれ、新聞は無し、電信電話もなし、その國、その周圍の人々が知つてゐた位で、廣く世の中には傳はらないから、みんな豪い高僧明德のやうな顏をして威張つてゐられるといふ譯なのだ。

鰯の頭も信心からと云ふ、惡い所は分らなくつて、善い所ばかりが人の耳目に傳へて殘つてゐるから、さてはや、お有り難う御座いますわけで、飛んだ御利益を授けられる心組で心信もするのだが、一皮めくれば佛も一切凡夫と少しの違は無い、佛顏してゐるだけ人間よりは罪が深いかも知れない、どうせ極樂へは行けまい、極樂へ行けないやうな佛樣を信心したつて、自分たちが極樂へ行けやう筈が無いから、信心しない方がいゝ、とは言ふものゝ、そこが凡夫の淺ましさで、もしやと云ふ掛念がある、自分が惡心惡行がある、佛樣を欺かして信心したと見せかけて極樂へ行きたい行きた

いが嵩じて、さて望みの通り極樂へ行つた男があつたが、聞くと見るとは大違ひ、極樂も極樂でなく、佛様も目のあたり御目にぶら下つて見ると、婆婆で想像して有りがたがつて居た程にゐらくも何とも無いので、急に厭氣がさして來た、厭氣がさして來ると娑婆が戀しくなつて來て、そこでまた元の浮世へ逃げて來たといふ、極く心がけの善くない男が、世の中の善男善女に、極樂へ行きたいなどゝいふ不心得を起さぬやうに、そしてまた、佛様といふものは、我々が娑婆で胸に描いてゐた程有り難くも何ともないと云ふことを知らせるために、あらゆる佛様のアラを探して書いたのが、そも〳〵此の本の著述された譯であるから、面白いこと、可笑いことは申すまでも無い變なこと奇怪いことも無いでも無い、痛快なこと利益になることも澤山ある。

評判は讀んで見てからのこと、面白いと思召したら、近所合壁へ御吹聽永當々々御誘ひ合せて御見物ではない、御購讀の程を御願ひ申す、詰らんと思召したらその儘知らぬ振をなされませう、が、大丈夫、詰らないことは無い、面白いに決つてゐる、斯く申す著者が自分から面白いと保證するのだから、先づ以て間違ひは無い。

そこで、いよ〳〵佛様の棚下しに取りかゝりませうかな。

一、閻魔大王

世の中に厭なことも澤山あるが、何が厭だと云つて死ぬ位厭なことはあるまい、姑婆が嫁と衝突して浮世が厭になつて、佛様に御願ひ申して、

『早く冥土へ連れて行つて下さい』

と云つた、ところが佛様が善哉々々、御婆さんの殊勝な心がけに感心して、

『それぢやお婆さん一所においで連て行つてやらう』

と仰有つて手を出した所が、婆さん叱驚仰天して終つて、極樂往生の願下げをした

と云ふ話がある。

一休といふ浮世を茶化して暮した悟道徹底の坊主でさへも、死ぬのは厭だといつたして見れば死ぬと云ふことは餘り嬉しいことでは無い。

第一、黄泉の旅路へ行つて、何方が西やら東やら分らないで、彼方へまご〳〵此方へまご〳〵、坐頭が迷子になつたやうに烏鷺々々してゐるのは餘り體のいゝものでは無い、丸で彌次郎が、赤坂並木へ引ぱり出されて、新内の出語りで踊りぬいてるやうだ。

『もし〳〵、是から何方へ行つたらいゝんです』

と聞く始末、行く先がてんで分らない、お先眞暗なのだから厭になつて終ふ。

『何でも此の先に三途川と云ふのがあるさうですが、渡船を渡るとそこで閻魔樣のお調べがあつて地獄なり極樂なりへそれ〴〵行れるのださうですよ』

成る程向ふに川がある、それが娑婆にゐるときに聞いてゐた三途の川と云ものだなは、あ、船頭が呼んでゐる、此の日進月歩の世の中に不景氣な、橋もなけりや汽船もない、渡船とは氣の利かない話だ。

『さあさ、亡者どもはみんな乘つた〳〵』

『もし〳〵船頭さん、渡船錢はいくらですかね』

『渡船錢はいらないよ、つい此間までは取つてゐたがね、近頃は六道錢を入れてよこさないから、冥府會議の結果、渡船錢は官給といふことになつた』

そんな事は言ひはしない、皆どろ〳〵と乗り込む、餘り騒いで川の中へ落ちると蘇生るといふことだ、彼岸へついてドロ〳〵上つて行くと、正面突き當りが閻魔の廳だと云ふ、佛説に依つて閻浮州の南方、鐵圍山の外部にある役所で、亡者在世中の是非曲直を裁判する役所である、所長は閻魔大王と言つて、十八の將官を率ゐ、八萬の獄牢を從へてゐると云ふ恐ろしい叔父さんである。

門がぎいつとあくと、獄卒が亡者を呼び込んでゐる、やがて閻魔大王出御あらせられて亡者を裁斷遊ばすのださうだ、正面小高いところにゐるのが、卽ち世に閻魔面で通る恐ろしい面構の本家本元、閻魔大王であらせられる。

左右に綺羅星の如く居流れたのが十八の將官、青鬼赤鬼黑鬼が鐵の棒を持つて控へて御座る、淨玻璃の鏡、業の衡器、釘板、すべて娑婆にゐる時寄席で落語家の笑ひ話

閻魔大王

に聞いたのとちつとも違はない、一々呼び出して、一々閻魔帳と照し合せながら御調べだ。

善事をした者はすべて極樂へやる、虚僞、殘忍、殺人、詐欺、僞善、あらゆる不德惡行を働いたものは、金があつても、地位があつても、學者でも、美人でも、一束五錢の薪のつもりになつて地獄の釜の中へ投げ込んで終ふのである、善人のやうな顏をして惡いことをした宗教家だの、教育家だの、國家國民を欺むいて私利私慾をむさぼつた實業家や政治家は、みんな血の池だの、針の山だのへ追ひやられて、長い攻苦に逢ふのだ。

賽の河原といふ景色のいゝ所がある、こゝには罪のない子供や、年頃になつても男は女を知らない、女は男に接しない、近頃の言葉でいへば童貞の男と處女が、この賽の河原へ行つて樂をして遊んでゐる、中には閻魔樣を欺かして賽の河原へやらせて貰はふと思つて、

『私はまだ男に接したことはありません、處女で御座います』

と云ふ二十ばかりの美人、閻魔大王、ぢろりと睨んで、

『よし、それが本當か僞か淨玻璃の鏡にうつして見ろ』

と云ふ、青鬼赤鬼がやつて來て鏡の前に立たせると、男に接したことが無いどころではない、色男が二十七人と半もあつたといふ、恐ろしい女だ。

『怪しからん女だ、僞を吐いたから舌を拔いて、血の池へ投り込め』

と、美人の女は、詰らないことを言つたばかりに飛んでもない處刑に逢つた、日本の俚諺に『僞をいふと閻魔樣に舌を拔かれる』と云ふのは、是から始つたのだ。

その位嚴格な閻魔大王だ、ちよつと僞を云つても舌を抜くといふ位嚴しい閻魔大王だから、惡を憎み、善を賞め、正直な、まつすぐな佛様かと思ふと、さて上手の手から水も洩ると云ふ譬の通り、部下の十八將官や、八萬の獄卒の中には、慾に目のない極道な奴もゐて『地獄の沙汰も金次第』などゝ人の惡口にも云はれる、人間の是非曲直を裁判して、地獄行と極樂行を決めるといふ位のやかましい役所でも『金次第』で如何にかならうと云ふのだから、死に切れない、浮世の我利々々連中が、やれ押川事件だの、九管事件だの、シーメンス事件だの、日糖事件だのといふ收賄贈賄の瀆職事件が絶えないのは、誠に以て止を得ざる次第であると申す。

さりながら、經文に所謂、一切の造惡不善を止め、諸善を勸め、生類を饒益する役目の閻魔大王の部下から『地獄の沙汰も金次第』などといふ奇怪な俚諺が流行出したのは甚だ怪しからぬ。

二、地藏菩薩

冠を戴き、椅子に腰をかけて、手に笏を持ち、團十郎そこのけと云ふ大眼王をむいて、閻魔面をしてゐる閻魔大王の兄弟に、所謂地藏眉などゝいふ柔しい、新月のやうな、柳のやうな美くしい眉を持ち合せたのつぺりした地藏様があらうとは、お釋迦様は先刻御承知だが、凡夫の我々は少しも知らなかつた。

もつとも、『借る時の地藏顔、返す時の閻魔面』と一口に云ふ位だから、一佛二體、強ち御緣がないとは言はれない、地藏は慈悲忍辱の表現であるとは、そんぢよ其所らの生臭坊主も知つてゐる、依つて以て、地獄や餓鬼道を坊主頭をふり立て、錫杖つい

て亡者どもを救ひあげたり、賽の河原で五つ六つの子供の御相手になつたりしてゐのは、本來、忉利天で釋迦牟尼佛から仰をうけた結果で、釋尊滅後、彌勒佛出世前、無佛の世に於て衆生を濟度しやうといふのだから無限無量の大慈悲心に感泣の涙をこぼさねばなるまい。

地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天間道の六道を能く教化救濟するといふので、佛説では六道能化の地藏尊と云ふ、娑婆の人間が道ばたや墓地の入口に六地藏を建立するのも此の意味からである。

何がさて豪いものだ、天人を化し、人間を化し、畜生を化し、地獄餓鬼修羅の六道をよく教化すると云ふのだから、その慈悲は廣大無邊なものだ、武士の一諾金鐵の如しといふけれども、お釋迦様に頼まれたばつかりに、一つの身體で六つの使ひわけはお骨の折れること御察し申す。

何しろ人間とは一番親しい、なつかしい佛様である、そして一番御利益がありさうな佛様である、そのせいか、安産地藏だの、子育地藏だの、子安地藏だのと拜み倒して、お團子の二つか三つあげて、人間の力で如何することも出來ない子種を強請申す女房さんもあれば、赤い腹掛を飾つて子供の無事息災を御願ひしたり、産科婦人科や小兒科のお醫者ぢやあるまいし、もつとも、御團子や赤い腹掛けで濟むなら、お醫者様へ高い診察料を出して苦い藥を呑むにも當らないのだから、御安い御用だと仰有る、いえさ、御願ひ申す當人がさ、御地藏様はアイ〳〵左様でございッて言ふか如何かそれは知らない。

延命地藏だのといつて、長壽を御願ひする慾の深いのや、色地藏などと、あられも

ない、出雲の神様の領分へまでのさばり出して御願ひ申す不所存者も、廣い世の中には澤山ある、さてはや呆れかへるの面に水をかけたよりも、もつと洒蛙々々した厚かましい奴では御座る。

中には、食ふに困つたそんじよ其所らの放蕩書生が、ノーヱ節なんかを拵へて、あの薄暗い露路のかげで、ヴアイオリンか何かで怪しげな聲を張りあげて、

『お客飽きれば石の地藏様、石の地藏様頭が丸い、頭丸けりや烏がとまる……』

なんかんと歌はれて、一錢二錢の合力を受けて怪しい本を賣りつける手段にも使はれる、それでも地藏様はちつとも怒らない、物事に忍耐强く、動かざること大地の如く、善男善女の所願を愼重熟慮して秘藏の如く、御利益を與へるといふので、さてこそ地藏菩薩と尊稱するのだと、御經の本に書いてあつた、頭が丸いやうに心も丸いどうか我々人間も、地藏様に肖かつて、丸くおだやかに人交際をして行きたいものだ。

三、釋迦如來

西暦五百五十八年前の春、櫻花咲く四月八日の午後、中印度の迦毗羅國王、首頭壇那の皇妃摩訶摩耶夫人の腹から一人の男の子が生れたばつかりに、世界の歴史と云ふものが、どんなに難かしくなつたか知れやしない、おかげで小中學の生徒が飛んだ難儀をさせられて居る。

何故と言つて御覽じろ、悉達太子が生れなかつたらば、御釋迦様といふ人もなく、從つて佛敎といふものも無い、佛敎のない世界の歴史と云ふものを考へて見玉へ、佛敎のない日本の歴史を考へて見給へ。

紀元一千二百十二年、人皇第二十九代、欽明天皇の御宇、朝鮮の百濟王が佛像經文を献じて大に佛敎の功德を說いたのを序幕に、これを禮拜すべし、すべからずの兩派に別れて、蘇我氏物部氏の兩大臣が喧嘩をしたのも佛敎のためである。

佛敎が傳來したばつかりに、寺を建て佛像を造ることが流行して來て、四天王寺だの、法隆寺だのと云ふ大伽藍、壯麗な堂塔が今も尙殘つてる譯である、高麗の僧曇徵と云ふものが第三十三代推古天皇の御代に來朝して、紙、墨、繪具の製法を傳へてから繪畫も發達した、敏達天皇の御代に佛工が朝鮮から來て彫刻の術を傳へてから、木佛銅佛も造られたので、奈良の大佛や、東大寺、正倉院などいふ建築も、みなすべて佛敎興隆の結果である。

僧兵と云ふものが出來たのもその結果で、僧兵を鎭定するために武士に京都を守衛

釋迦如來

せしめた結果が、源平二氏の勃起となつて、政權が天皇の御手から民間に掌握されるやうになつたのである、佛敎さへ來なかつたなら、釋迦さへ生れなかつたなら、日本の歷史は、以上略述したやうないろ〳〵の重大問題が無いから、どんなに覺えいゝか知れやしない。

もつとも其代り、文學美術工藝、其他社會百般の進步も今日の如くではなかつたかも知れないから、それが果して日本の幸福であつたか如何かそれは分らない――所でそれは兎に角として、佛法發明製造の元祖、本家本元、釋迦牟尼佛の棚下しを始めませうかな。

傳說によると、お釋迦樣は三年の間その母の腹の中にゐたと云ふ恐ろしい氣の長い人だ、おまけに胎內にゐながら、時々母摩耶夫人の夢に現はれて、人倫の三生を說き世界の十掟を述べ、十恩の說を聽かせたと云ふ變り者である、老子は母の胎內にあること八十年、生れながら物を言ひ地を步んだと云ふが、何の何の、お釋迦樣は生れないうちから說敎をして御座つた。

四月八日、花咲く春の宴を、藍毗尼園で催した時、母の摩耶夫人が父の淨飯大王の命に依つて無憂樹の花を折らうとすると、あゝら不思議、どろ〳〵と鳴物の相方になつて、虛空から金色の光を放つて二流の旗が天降つて無憂樹の梢に飜がへり靈光四方に薰じて、園中の草木悉く光り悉く香つて來た、手を延ばして花を折らうとすると、その脇の下を破つて王子御降誕あらせられたと云ふのだから、腹を破つて、十二一重の御衣を破つてころ〳〵と轉がり落ちたものと見える。

所が如何です、此の時無憂樹の下に七寶の蓮華が急に出來て、王子を受とめた、二

流の旗は金色二體の龍神となつて八色の光を放つて虚空に飛揚し、淸淨功德の產湯を降らした、なめて見たら甘かつたので、それ以來四月八日の御釋迦樣の日にはお寺で甘茶の攝待があります。

そこで、その淸淨功德の水で產湯を使はせると、諸々の不淨が洗ひ流されて黃金の光を發し、毛孔から大光明を放ちて三千世界を照らしたと云ふが、諸君これは僞です、西曆五百四十八年の四月八日の世界歷史にも日本歷史にも、そんな大光明の見えたと云ふことは書いては無い。

まだ〳〵大變です、僞を言つた序でにもう少し僞を書かせて貰はふ、何、舌を拔かれたつて構ひませんや、その舌を拔く閻魔樣からして、元來がお釋迦樣の方便から出た佛樣です。

天上には梵天帝釋萬眷族四天王及び無數の諸天諸佛が來降して王子を敬禮し、天外の惡魔はわが道是より衰退すべしといつて泣き悲しんだ、その時王子は蓮の台を下りて、前へ三足後へ四足歩んで、左に天を指し右に地を指して、

『三世了達、四弘誓願、諸法塵內、天上天下、唯我獨尊』

と獅子吼したと云ふのだから、大した產聲だ、普通の赤ん坊ならおぎあ〳〵と云ふ所を、お釋迦樣だけに大聲に怒鳴つたのだから、大がい吃驚仰天して終ふ。

けれども諸君、こりや僞ですよ、いつくら何だつて、生れぬ先に物を言つたり生れる日を豫言したり、生れながらにして七歩を歩いたり物を言つたり、そんなことが出來るもんですか、末世の僧がお釋迦樣を豪く思はせやうがために拵へた物語です、日本の俚諺に『僞つきは泥棒の初め』とも云ふ、僞は諸惡の根源である、諸善奉行が佛

教だと云ふのに、その佛教の元祖、お釋迦樣の降誕がこんな僞で固められてあるのは甚だ以て怪しからぬことで御座る。

其所で生れた王子は、是程の瑞相があり、おまけに三十二相八十種好を具足した玉ふやうな男の子であつたが、脇腹を破られた母の摩耶夫人はとう〳〵七日目の朝死んでしまつた、つまり有體に云へばお產が重くつて、產後の肥立が惡くつて死亡つたのである。

生れた王子の名は最初に瞿曇と名づけたが、どうして愚鈍所ではない、總明英邁、悉く達せざるは無いと云ふので、悉達太子と呼ぶやうになつた、本覺如來の化身で衆生濟度のために假に摩耶夫人の腹に宿つたと坊さんたちが言ふ程の豪い方であるから、初めて筆を取り書を學び十日も經たないのに天性不測の筆力、悉く法に叶はぬはなく、書籍を開けば天文地理算數及び諸道の理に通じ給はぬは無かつた。

當時の博士覽弗と云ふ學者に就て學ばしめた所が、世益論及び誡諦論の三百冊のうち、誡諦論を選んだので、覽弗博士は驚いて、

『王子の總明、一をきいて萬を悟る、古今未だ有ず後世猶稀なる神才、とても臣が力で御教へ申すことは出來ません』

といつて辭退した、何故かと云ふと、世益論といふのは、仙家道術醫藥の書で、國家國民を益する書物、誡諦論といふのは上求菩提の書、發心報謝論といつて佛法の教を書いたものである。

國王の世子悉達太子が、世益論を讀まないで、發心報謝論を勉强しやうと云ふのはさてこそ一天萬乘の位を捨てゝ出家得道の望みがあるのだと、早くも看破した覽弗博

士もくせ者、自分の家で勉強してゐるうちに坊主になられたらそれこそ一大事、御咎めの程も恐ろしいと、そこで體よく逃げたのである、然らば誰を師として文事を學ばせたらよからうと云ふ國王の仰せに、

『伊那里國香山の阿私陀仙と申す神通廣大の賢人がよろしう御座らう』

と云ふので、そこで阿私陀仙を呼ぶと云ふことになると、阿私陀仙は早くもその意を悟つて、招かざるに來つて悉達太子を見て、

『これは三界の至尊である、十九にして王位を嗣ぎ國威を八紘に輝やすであらう、然し恐らく出家得道して人天の大導師となるであらう』

と云つて、瓢然として座を立ち、袖を拂つて雲を招き、虚空に上つて香山へ歸つて終つた。

世の中にもう太子の先生となつて太子に文字を教へるものが無い、太子の心に任せて文武の道を出精させた所が、どうして中々エラい、聰明英智、悉く達せざる所なしと云ふのだ。

女の髪は大象をつなぐと云ふ位、美くしい綺麗な女をあてがつたら、坊主にならうなどゝ云ふ不心得は起すまいと、普く諸國に美女を寡つてこれを都に集めた、その數七百餘人、摩耶夫人の姉憍曇彌夫人が、その中から殊にすぐれた美女を百人、百人の中から二人の美女を選り抜いて是を太子の妾とした、鹿野女、瞿夷明女の二人がそれである。

その外更に、三千の官女を侍せしめたといふ、その上に、本妻としては隣國の王女耶蝓陀羅姫と云ふ小町も衣通姫も裸足で逃げる程の絶世の美人を迎へてくれた、この

王妃の腹から十大弟子の隨一で密行第一と稱された羅睺羅尊者が生れたのである、二人の愛妾の腹からは優婆摩耶、善星の二人が生れてゐる。

傳說に依ると、悉達太子は二人の愛妾とも、正妃の耶輸陀羅とも、晝は左右に侍らせたが夜は枕席を共にしないと云つてあるが、それは僞です、枕席を共にしないで子供の出來る理由がない、これもお釋迦樣を豪くしやうと思つた後世の僧侶の物語に過ぎない、まして羅睺羅が六年の間母の胎内にゐたと云ふのも、所謂佛の方便に過ぎないのである。

茲に甚だ怪しからぬ傳說がある、それは天上の淨居佛が、或は病人となり、或は死體となり、或は僧侶となり、三度び悉達太子の心を試みたと云ふことである、本覺如來の化身で、衆生濟度のために假に人間に姿を變へたものならば、何もわざ〳〵その道心を試みなくも善い、衆生濟度のために人間に生れさせてをいてその心を試すとは人を馬鹿にした話だ、釋迦如來たるもの、大に腹を立てゝ、

『それ程私が不安に思召すなら、この大役は誰か他の人に言ひつけて下さい』

と云つて御免を蒙むつてもよろしい譯である、と、まあ著者は思ひますがね、如何なものでお座せうか。

もつとも是は、傳說であつて、實は左右に美人に倚づかれ、榮耀榮華に暮して、苦も惱みも知らぬ若い貴公子の悉達太子が、病人を見、死者に逢ひ、坊主の法話を聽いて、現世を悲觀し、衆生濟度の本願を樹立したものと見るのが當を得て居る。

そこで、無常を感じた悉達太子は、一夜私かに城中を忍び出た、女官も侍女も皆眠り疲れて正體を失つて倒れてゐる、或は口からよだれを流し、あるひは高鼾をかき、

丸で河岸へまぐろがついた時のやうに淺ましい風をして眠つてゐたので、益々人世の淺ましさを感じ、出家得道の志を固め、遂に愛馬犍陟に乘つて、車匿に口を曳かせ宮殿を出た。

其晩に限つて、四方の門を守る番卒とな眠り、城門を開閉するごとにその音が廣さ四十里に響くやうに拵へてあつたのが、すうとも言はずに自然に開いて、太子が出て終ふと又自然に閉つたと云ふ、そこで城門を顧みて、

『我若し人生の老病死憂悲苦惱を斷ずんば、又宮に還らず、又法輪を轉ずる能はずんば父王と相見ず、當に恩愛の情を盡さずんば遂に還つて母夫人及び耶輸陀羅女を見ず』

と、心に誓つて、檀特山を臨んで駈けて行くと、四天王が先駈けして惡魔の障碍を拂ひ、金剛明王、梵天帝釋、自在天等の諸天が太子の前後を守つて、山を見ず川を見ず、風に乘じて一夜のうちに一千三百里の行程を飛んで檀特山に着いたのは、不測と云ふも疎なる次第なりけりである。

そこで、馬と車匿に別を告げて、檀特仙に上り、跋迦仙、阿羅仙、迦羅々仙などと云ふ大德の仙人に就て、法を學び行を修めたが、どうもそれだけでは滿足が出來ない、更に雪山に於て難行苦行を積んで、あらゆる迫害と、あらゆる苦痛とに耐へ忍び遂に其年三十歳の十二月八日の曉、燦たる星光を上天に仰いで、廓然として宇宙の大眞理を感悟したのである。

一切の衆生悉く佛性ありと云ふのは、彼が開敎の根本をなす眞理である、佛性あるが故にこそ、佛を信じ佛に救はれて極樂住生に達するのである、善惡の應報に從つ

て六道に流轉し、生死の苦海に沈淪してゐる衆生の、この佛性を覺醒せしめて、やがて又もとの佛に歸せしめるのが、釋迦如來出世の本願である。

基督敎に所謂、天地の萬物は全能の神に作られ神に歸ると云ふのと、根本の道理は同じである、唯、是は佛といひ、彼れは神といふだけの相違に外ならないのである、衆生濟度の本懷は元同一である、けだし、東西の哲人、その歸趣を同じうするものである。

佛を信じて生死の苦海より出で、人間本來の佛性に歸つて涅槃に入るのが、人生の歸趣である、釋尊十二年の難行苦行、五十餘年の說敎法話、八萬四千の經文、詮じ詰めれば、唯この一大眞理の體現にあつたのだ。

そこで雪山を出て、三迦葉、舍利弗目蓮等を歸依せしめたのを初めに、東奔西走、后妃たりし耶輸陀羅姫、愛子羅睺羅等を濟度し、三十の成道以來、五十年の間說さて盡きず敎へて飽かず、八十の老齡に及んで、拘尸那揭羅城外、跋提河畔の沙羅双樹の下で、寂然として大涅槃に入つた、それが二月の十五日である。

極樂といひ、地獄といひ、畢竟するにお釋迦樣が、無智な人間を濟度するために拵らへたもので、人生の歸趣が如何だの、人間の佛性が如何だのと、むづかしい理窟をならべるよりは、善いことをすれば極樂へ行ける、惡いことをすれば地獄へ行くぞよと言つた方が分り易い、極樂とは如何なところか、地獄とはどんな所か、古往今來幾百萬年、死んだ人が歸つて來た例が無いからお釋迦樣の幸福と云ふもの、いゝ加減な僞八百を並べて善男善女を欺したのである。

惡いことをしたものが地獄へ行くなら、第一お釋迦樣からして地獄へ行かなくつち

やならない、何故と云つて考へて見玉へ、母の胎内にあること三年、其の間母を苦しめたこと是れ一大罪である、次に、その脇腹を破つて生れ、生れながらにして母を死に到らしめたこと、これその罪の二である、赤ん坊の殺人罪なんぞこれを罰する法律もない、言語同斷である、大恩ある父の心に背き家を出でたることこれその罪の三、不孝是より大なるはない、第四には生みの恩より育ての恩と云ふ程の繼母嬌曇彌夫人の心に背いたこと、第五には貞操の正しい后妃耶輸阿羅を捨てたことである、斯やうに五逆罪のあるお釋迦様が、どうして〳〵佛果が得られやう、極樂へ行けやう――と檀特山である賢人に叱られたでは無いか。

それは先づ、長年の難行苦行で罪亡ばしが出來るとしても、兜卒天だの、西方淨土だの、五十五億七千萬年前に毗婆斯佛があつたとか、五十六億七千萬年の後に彌勒菩薩が出て衆生を濟度するとか、途方もない大法羅を吹き立てゝ、見たと云ふものがないのを幸福に吹きも吹いたり、並べも並べたり、閻魔様に舌を拔かれるのはまづ以てお釋迦様が一番先だ。

もつとも今の世の中には、巣鴨病院へ行くと芦原將軍なぞと云ふ誇大妄想狂がゐて世界を創造して、萬機掌を指すやうな大法羅を吹いてる者もあるし、千里眼だの、透視だのと云ふこけおどかしの手品を使つて愚民をまどはしてゐる者もある、お釋迦様がその類の人間だと云ふのではないが、お釋迦様が今の世の中へ、もし間違つて生れてくれば、きつと巣鴨病院へ連れて行かれて、特別取扱をされて納りかへつてゐるかも知れない。

然し要するに、極樂地獄や、彌勒が如何の、阿彌陀佛がどうのと云ふのは、釋迦如

來の理想境を説いたものであることを忘れてはならぬ。

然し、こゝに、そりや聞えませぬお釈迦様といひたいことがある、それは坊主は女房を持てはならぬと云ふ教である、もつとも今の坊主は女房どころぢやない、藝者買もすれば妾も持つ――が、とにかく、方便なら少し位の僞は言つてもよいと教へてゐる程わけの分つたお釈迦様が、坊主の女犯を禁じたのは、そりや聞えませぬお釈迦様お言葉無理とは思はねど。坊主だつて人間です、第一、坊主自からは誰の腹から生れると思召す。

それもさ、御自分が女房も持たない、子もないと云ふならとにも角にも、御自分が美人の妻を持つて子まで生ませてゐながら、弟子達にはこれを禁ずるといふのは實以て分らない話であります、生じ女犯を禁じたゝめに、隱れて妻を畜へたり、良家の處女に戯むれたりする破戒無慙の行をする坊主が出來たのではあるまいか。

一切の衆生悉とく佛性がある、女だつて佛性はある、いやそれ所ぢやない、一休和尚ぢやないけれども、釈迦も達摩もひよい〳〵と生むのは、この女があるからではないか、女犯を禁じたのは、これだけは、お釈迦様のやうな萬事に抜目のない方にも似合はないことである、とは言ふものゝ案じるには及ばない、末世の僧は、ちやんと女房も持てば肉食もする、親鸞上人と云ふ本願寺の開山様が、御手本を見せてゐるんだ。

そこで、お釈迦様の御名前は何所から出てゐるかと云ふと、傳説では雪山で正覺成道を得た時に十萬三世の諸佛が、異口同音に『三界六道の教主、十萬最勝光明無量三學無碍、億々衆生平等引導の能化、南無釈迦牟尼如來、本佛本佛』と唱へたから

そこで夫以來釋迦牟尼佛、或ひは釋迦如來と稱し奉るのだと云ふ。

或は學者の說によると釋迦牟尼佛と云ふのは、日本の語に意譯すれば悲智の大覺者と云ふことである、悉達太子が成道して、慈仁、智惠を普く衆生に與ふるが故に釋迦牟尼佛といふのだとあるが、何、そんなむづかしい譯があるのでは無い。

釋迦と云ふのは、中印度の迦毗羅國邊に住んでゐる種族の名である、大和民族、チエック族と云ふのと同じである、そこで牟尼とは無二である、無二の智者である、ムニは梵語の智意味である、そこで要するに釋迦民族中の智者と云ふ意味で釋迦牟尼といふのであるさうだが、やがてそれが單に佛陀の固有名詞と變化したのであるさうな。

四、阿彌陀如來

極樂淨土の王樣、他力本願の一手專賣所、阿彌陀如來と仰せられるのは、此の佛樣であります、御信心の方は、まづ御燈明あげられませう。

一度び此の佛樣の御名を唱へれば、極惡重人といへども、餘さず漏さず救はるべし一念不生、唯一聲南無とお賴み申せば、極樂往生疑なしと云ふのだから、何と大慈大悲の廣大無邊の御惠である、勿論、お釋迦樣の方便から生れた佛樣で、久しく世に逢はないで埋もれてゐたが、やがて日本の國は鎌倉時代に、親鸞上人がお供をして來て以來、素的な勢で流通して今では日本一の信仰を博して、東西兩本願寺を始めとして、あらゆる國々に納りかへつて御座る。

衆生濟度のために、四十八の大願を樹て生死憂苦の海に乘り出して、迷ふ煩ふ亡者を救つて、西方十萬億土の極樂國に送ると云ふのが、此の佛樣の仕事である、昔は御

關所と云ふものがあつて、手形がないと通れなかつたが、極樂へ往くには、阿彌陀樣の手形が無くつちやならない、佛敎の經文によると、宇宙の一切衆生を『安樂國に生せしめ』るのが阿彌陀樣の仕事である、それも一文でも金を取らうと云ふのではない南無と唯一聲、名號を唱へればいゝのだ、それが極樂往の手形である、有り難や御有難や歸命頂禮である、南無阿彌陀佛々々々々々々と言はざるを得ない。

ところで、それ程安く來られる極樂だから、詰らない所だらうと思ふと大間ちがひ如何して中々立派だ、生死がない、不老不死である、寒暑がない、何時も春のやうに麗かな氣候だ、苦痛がない、いつでも歡樂に滿ちてゐる、七寶の樹林、七寶の池、百花野に咲き、溫風吹き、微妙音樂絶えず耳に響き、不斷の香匂ひ、まつたく以て極樂淨土の名に背かない、それがたゞ、南無阿彌陀佛と唱へて、阿彌陀樣へ御願ひ申せば、その極樂淨土へ往かれると云ふのだから有り難い幸福である——僞と思つたらば一遍南無阿彌陀佛と唱へて見玉へ、極樂往生疑ひなしである、飛行機だ、暴烈彈だ潛航艇だ、やれ何だ彼だといつて戰爭して、國と國の取りやりをするより、南無阿彌陀佛と唱へて、極樂國へ往生して往く方がどれ程幸福かも知れない。

極樂往生の捷經は、お釋迦樣のやうに難行苦行をしなくもいゝ、肉食を禁じ、妻を貰らず、口に不淨を唱へず耳に不淨を聞かず目に不淨を見ずと云つたところで、此の世の中は不淨に滿ちてゐるのだから、言はず見ず聞かずなんて、石に彫つけた三猿ぢやあるまいし、目があれば見もしやう耳があれば聞えもしやう口があれば言はずばなるまい、其所で、何をしやうとも、口に彌陀の稱號を唱へさへすれば極樂へ往けるのだ。

肉も食ふべし、妻も貰ふべし、黄金も欲がるべし、頭髪も綺麗に延ばして眞中から
わけても惡くはない、何もくり〳〵坊主になるには及ばない、たゞ一念彌陀の稱號を
唱へて、彌陀の誓願に信じて、救ひ玉へ、極樂へ連れて往つて下さいとお頼み申せば
看板に偽はない、極樂國へ連れて往つてくれる――これが阿彌陀様が此の世に出て
來た本願である、肉を食ふのも人のため世のためである、妻帶するのも子孫繁生のた
めである、金錢を拵へるのも國家を富ましめる所以である、もと是れ自分一身のため
では無い、斯う思つたら惡いことは少しもない、さすがに阿彌陀様はさばけた佛様で
ある、斯うさばけた佛様だから、日本の國へ渡つて來て善男善女の信仰を博したのも
決して無理とは申されない。
けれども、本當に南無阿彌陀佛と六字の名號を唱へさへすれば極樂往往が出來るか

阿彌陀如來

と云ふと、拙者それは受け合ひかねる、が、然し、古來、極樂へ往つて歸つて來たものゝない所を見ると、或は本當かも知れぬ、本當でなくても、歸つたものは無いのだから構ふことはない、何とでも旨く說法して、成るべくお宗旨へ引ぱり込みさへすればよいのだ――と、そんぢよそこらの末世の僧侶の寢言にもある。

坊主からして左右いふ心がけだから、これを信心して、他力本願にすがると云ふ善男善女も、たゝ口先でばかり御名號を唱へて、佛樣を欺さうとしてゐる、あらゆる罪惡を犯して、私利私慾のためには國家國民の迷惑も顧みないやうな實業家だの、政治家だのと云ふのが、勿體らしく珠數つまぐつて、

『南無阿彌陀佛』

と、殊勝らしい顏をしてゐるのだから呆れかへつて終ふ。

家にゐると、珠數をつまぐりながら、何の罪もない嫁を窘める姑婆が、お寺詣りをして、本尊樣の前へ出て手を合せ、生臭坊主の說敎をきいて有り難涙をこぼし、家へ歸れば又しても何かと云つて嫁に當りちらして、はては長煙管の攻め折檻もするのだから、大がい阿彌陀樣も呆れて終ふであらう、然し、慈悲忍辱の阿彌陀樣は、何ごとも我慢して見てゞざるから、結局はこの姑婆も極樂往生が出來ることでがな御座らう。

昔は、頭をくり〳〵剃つて坊主になつて、何の某入道などと殊勝に念佛三昧に入りながら、さて戰といふと、イの一番に乘り出して人を殺すこと虫を殺すが如き英雄が澤山あつた、多分、罪なき衆生を生してをいて此世の苦患をなめさせるのは可哀想だと云ふ、阿彌陀如來の本願に基づいて、一思に打ち殺して極樂へやると云ふ慈悲心

の發現であつたかも知れない。

無量、無邊、無碍、無對、燄王、清淨、歡喜、智惠、不斷、難思、無稱、更超日月の大光明を備へてゐると云ふ途方もない豪い阿彌陀様である、これを彌陀の十二光といふのであるが、三尊の彌陀といつて、觀音菩薩と勢至菩薩を左右に從へてゐる素晴しい方だ、二十五菩薩の來迎といつて、二十五の佛様が御出迎へしたり御送りしたりすると云ふのだから、出入共に昔の大々名にも劣らないと云ふ大隈侯爵も後に撞着たらざるを得ない、そして、おまけに總身は光明赫々、遍照十萬世界だと云ふから日本一の法羅吹き、大隈侯爵の禿頭も及ばない譯である。

たゞし、斯ういふゐらい佛様がほんとうにあつたか何だか、それは保證の限りではない、例のお釈迦様の理想から生れたのであることだけは確實である。

此の佛様の前生は、昔印度の立派の國の王様であつたさうだが、子供が澤山あつたさうだ、所が世自在王佛と云ふ佛様に歸依して、初めて佛道に入つたのがそも〳〵で衆生濟度の大本願も起したのだと云ふが、その子供がみんなゐらい佛様になつてゐる——こういふ子澤山の佛様を日本に流通させた親鸞上人が、おほつぴらで妻帶をして坊主でも女房を持つて差支ないと云ふ御手本を初めたのは、豈それ故なからんやである。

從つて、本願寺中興の蓮如上人などゝ云ふ和尚様は五六人の妻妾があつて、二十何人の子供を生せたといふ精力絶倫の坊さんが出來たのも無理とは申されない、だから自然、今日の本願寺の法主様や、末派の僧侶が、妻を持ち妾を蓄へてゐるのは、尤も千萬の沙汰で、少しも苦々しいことでも淺ましいことでも無い、が然し、我々凡夫の

見る所では、尊とき佛の御教を説く和尚様は、やはり妻帯肉食しない方が有り難く感じられる、日本人がみんな坊主になる譯ぢやあるまいし、佛の御教を説く坊さんだけ位、童貞であつても日本の人口が減少する譯でもあるまい。

況して、救世の本願を成就せんがために一生を犠牲として、法の道に身を棒げた坊さんだ、何の妻帯、何の肉食、そんなことでは、中々以て衆生を濟度することは覺束ないぞ、肉食を禁じ、女犯を禁ずる位の大勇猛心が無くつちや、千萬の老若男女を救ふことはむつかしいぞ。

人のことより我身のこと、御自分の清淨潔白を保ち、御自分の極樂往生することすら覺束ないやうな青道心に、衆生濟度とは大それたことだ、救世の本願もちやんちやら可笑しい、地獄の門へ入つて、閻魔の廳へ出て見給へ、娼妓や藝者がどん〳〵極樂へ往つて、かんじん要、地獄極樂の差別を敎へる坊さんたちが、淨玻璃の鏡にその汚ない、醜い腹ん中をすつかり照されて、地獄へ突き落されますぜ。

坊さん、しつかり頼んまつせと、言ひたくなるぢや無いか。

五、不動明王

阿彌陀様のやうな、ドエライ佛様は知らなくつても、不動明王を知らない者はあるまい、現内閣の文部大臣が誰であるかを知らない小學校の生徒も、大隈侯爵の名は暗誦してるやうなものだ。

不動明王程、芝居や物語に引ぱり出される佛様はない、成田利生記では桂川力藏に乘りうつつて利益を與へ、生來の非力を强力となして、とう〳〵親の敵の何某と云ふ

角力を撲り殺して首尾よく本望を遂げさせたり、那智の瀧では文覺上人の荒行を助けて、惡智惡見をその利劔で悉くるぐり出して、總明英智の大德にしたり、その他御利益の多いこと、中々數へ切れない。

とにかくお角力か强力を與へたり、文覺のやうな荒法師に利益を與へたりする位の佛様だから、その形相も見るからに恐ろしい、青黑い、怒りかへつた面を焔の中に現はして、大盤石の上に座を構へ、右手に惡魔降服の利劔を捧げ、左手に無道擊縛の繩を執つてゐる、惡を怒り惡を殺し惡を縛すのが、この佛様の、お釋迦様から命ぜられた仕事である。

詳しく言へば大聖不動明王と稱し奉る、五大明王の首座、中央尊でゐらせられる東京の深川では八幡様と同居して花柳演藝界の善男善女に御利益を授けてゐる、成田山に鎭座しては全國の信仰を博して、お賽錢の上り高が一日何千圓、二十八日の御賽日には何萬圓と云ふのだから、金儲の上手な佛様とも言へる、不動の金縛りと、諺にも言ふ位だから、御參詣の善男善女のふところ金や、爺さん婆さんの臍くり金を、とりあげて縛りつけて歸さないのかも知れない、が、折角不動様の儲けて下すつた金も坊さんたちが何につかふのやら、行方不明になつてしば〳〵大騒ぎのあるところを見ると、やつぱり佛様だけには、儲けは儲けても餘り使ひやうが上手ではないと見える中には同じ佛仲間の違名を犯すそんじよそこらの生辨天様に縛りあげられるのもあると云ふが、娼妓だらうが、藝者だらうが、假にも辨天様の名を犯してゐるのだ、こいつあ見逃した方がいゝかも知れない。

人の惡を怒り、人の惡を降伏し、人の惡を縛める不動明王も、自分の寺を守る坊さ

んたちの惡いことが見えないやうぢや、その御利益も怪しいもんだ、所謂燈臺下暗しと云ふ奴で、下は暗くつても燈臺は立派に役を努めてゐる、お利益があると云ふならば、われ亦何をか申さんやさ、名は體を現はす、動かざる明王とはよく言つたものさ

これぢや利劍は鈍劍、羂索は自縄自縛の縄を改めた方がよくは無いか。

經文の敎へる所にいふと、その相恰は惡魔降伏の姿で、右手の利劍は貪慾、眞恚、愚痴の三毒を切り拂ふので、左手の羂索は惡逆無道を縛るのだと云ふけれども、こうなつて來ると些と怪しいものである。

昔、科學の進歩しない時代では、斯ういふ尊像でこけおどかしの、惡魔も退散したらうけれども、あらゆる文明の利器が强盜殺人、詐欺恐喝に利用される今日の世の中では、不動樣も一つお宗旨を變へて、自働車か飛行機に乘つて、ダムダム彈でも打ち放しながらその威德を示さねば、中々以て惡魔も怨敵も退散すまい、さすがに五十六億七千萬年の昔を知り、五十六億七千萬年の將來を、掌をさすが如くに說き示したお釋迦樣も、不動樣を賣り物にして金儲をする僧侶が輩出しやうとは御存じなかつと見える。

大隈侯爵のやうに、大法螺は吹いても穴だらけ、そんな事だから、切られの與三郎のやうな駈け出しの靑二才に、

『お釋迦樣でも御存じあるめえ』

などゝ、自分の情婦のお富との痴話口舌にまで引つぱり出されて馬鹿にされるのだちと確りさつしやれ。

成田の不動樣は伏魔殿だとまで言はれてゐる、降魔の利劍を執つて威張つてゐる不

動堂が伏魔だなどゝは、ずい分と皮肉な世の中だ、是に依つてこれを見ると、世の中は理想通りには行かぬものだ、儘にならぬが浮世と云ふのは、生じつか頼まれもせぬのに、世を救ひ、衆生を濟度しやうなどゝ思つたのが、そも〳〵お釈迦様の不心得だと、力んで見ても始まらぬ話、不動明王の棚下しはこの位にしてをいて、さて、御次は大財辨天を御目通りまで控へさせませうかな。

六、大辨財天

一口に辨天様と云ふ位だ、萬緑叢中紅一點、眞黒々々の阿羅漢たちの中で、辨天様ばかりは、色白の、せいのすらつとした、柳腰花顔の、美人の佛様である、が、然し殘念なことには御亭主があります、御亭主は梵天帝釋と一口に並べて言はれる梵天と

云ふ先生である。

本名は、大辨功德天ともいひ、或は大財辨天女とも申す、唯單に大辨天とも稱される、日本では辨財天、又は辨天様で通つて居る、相州鎌倉は江の島、江州竹生島、安藝の嚴島の三ヶ所に天降りましまして、有緣無緣の衆生に御利益を授けて居るのが、まづ以て有名である、蛇體だと言ひ傳へられてゐるが、これは僞で、美人も美人、目のさめるやうな美人であつて、梵天様は頗る多情な佛様で、何十人となく妃があつたが、中でも此の辨天様を一番可愛がつたさうである、何、梵天様に肖りたいつて、誰だい、そんなことを言ふのは。

しかし幾ら美人でも、御亭主があつちや仕方がない、文展へ行つて賣約濟の美人畫を見てよだれを流してゐるやうなものだ、通りかゝりの丸髷の美人を見て岡惚をしてゐるやうなものだ、諦めろ〳〵、その代り、新橋柳橋、赤坂は申すに及ばず、よし町富士見町、下谷、日本橋淺草向島深川、ありとあらゆる町々に、生辨天がざらに鎭座して、お利益を授けやうとして殿方の御來迎を待つてゐます、お信心の方は、お寶を持つて御參詣したらよからう。

所で此の佛様は、末世の坊主が說敎中經文の文句を忘れたり、句義を失念したら、自分の智惠をつくしてその言說の辯を助け、演舌に差支ないやうにすると云ふ所から辨才天女といふのであるさうな、そして又更に一切の有情に不可思議の福智、辨才を與へ、かつ諸々の技術を解するやうにさせ、そして菩提を成就させるのが、辨天様の仕事である、だから、辨天様を信仰すると、何事につけても腕が上達すると言ひ傳えてゐる、柳橋あたりの生辨天を信仰すると、財產を蕩盡し、小唄位は唄へるやうにな

ります。

一體全體、辨天様が海邊とか、池の傍とか、水邊に祠を建立して祭られるのは、如以いふ譯か知らぬが、辨天様が蛇神だと云ふ信仰から出たものなら間違つてゐる、もつとも、現代の生辨天が、柳橋だの新橋だの、深川だの向島だのといつたやうに、水に縁のある土地に巣を食つてゐるのは、其の邊の意味も籠つてゐていさゝか面白い。

とにかく、辨天様は女の佛様で、美人であることだけは確實である、何でもせいぜい信仰をして、生辨天のやうな女房を貰ふやうに心がく可し、靈驗顯著であることは申す迄も無い。

七、觀世音菩薩

淺草の觀音様の御尊像は一寸八分しか無いと云ふけれども、本來此の佛様は、身長八十萬億由旬からあると御經の本に書いてある、八十萬億由旬とはどんな勘定か知らぬが、何にしてもお釈迦様も思ひ切つて法螺を吹いたものだ。

そこで、身に紫金の色を帶び、頭に髻あり、圓光あり、その圓光の中に五百の佛様がゐ、その髻の中にも又同じく五百の佛様が住んでゐる、全身悉く光り、光の中に五道衆生一切の色相が現はれてゐる、頭に天冠を頂く、その天冠の中に高さ二十五由旬の佛様が立つてゐると云ふのだから、如何して中々大きものである。

そしてこの觀音様の顔は、金色に輝やき、七寶色を備へ、身體から八萬四千の光を放射してゐる、變現自在、十方世界に滿つといふのだから豪いものだ、お釈迦様も大した佛様を拵へたものだ、何しろ八萬四千の光を放射する程の佛様だから、お里が懸

命の祈願を容れて、亭主の澤市の見えぬ目を開けたのも無理は無い。

俗には觀音様と云ふが、本當は觀世音菩薩とも、或は觀自在佛とも云ふ、觀無量對經に、變現自在とあるが如く、東京は淺草寺、京都では清水寺をその雄なるものとして、坂東三十三ヶ所、西國三十三ヶ所に鎮座ましますばかりでなく、馬頭尊と變じ、十一面觀音などゝいふ顔の十一もある佛様になつたり、手の六つある如意輪觀音、千手千眼の觀音、三目九對の身を有する准胝の觀音、聖觀音と云つて無畏の大安心を施す佛様ともなる、これが所謂六觀音で、何れも五體不具の佛様である、淺草の觀音様は、この聖觀音と云ふ一番穏和しい佛様である、馬頭觀音と云つた所で、馬面ではない、頭に馬頭の飾をつけてゐるので、何のことは無い、洋杖のやうなものだ、道理でこそ道傍に立つて道標をしてゐる、この佛様は畜生道を教化するのが役目ださうな。

その外、揚柳といつて柳を持つたのや、魚藍といふのや、瀧見だの、遊戯だの、蛤蜊さまだのと云ふ三十三の觀音様がござるが、何れも靈驗顯著の佛様だ、御信心の方はせつせと參詣たがよい、佛様にも、人氣のあるのと無いのとあるが、觀音様のやうに人氣の澤山ある方はない、虱を觀音様と云ふのは、觀音様が人間と一番仲のよい佛様だからであるかも知れない、虱は人間の體に湧く、人間の一番仲よしだ。

だが然し、あの小さな虱を、八千萬億由旬もあつて、頭に一千有餘の佛様を頂いてる大男の、力持の觀音様に比べ奉るなどゝは無禮千萬、失敬も甚だしい、それこそ本當に、壷坂のお里ぢやないけれども、觀音様も聞えませぬと言ひたくなる、聞忍ない譯だ、八千萬億由旬と云ふ大男の佛様ぢや高が女の泣聲ぢや蚊の啼く程も通じはしないのだ。

淺草の觀音様の裏に、六區千束町の銘酒屋があり、通りぬけて吉原の遊廓があるのも、又是れ、觀自在佛が、得意の變現術であるかも知れない、元來觀音様は變現自在の佛様であるから、そこらの姐さんたちは即ち、その觀音様が、若い善男に授け給はる御利益であるかも知れない、觀音様に變現自在の術を與へた如來様も、まさかこんなに變化しやうとは思はなかつたらう、もつとも世間の憂苦に應じて、應病施樂の大慈悲を與へるのが觀音様の表看板だから、若い男の性慾を滿たしめ、しかして是に依つて妓たちの物質慾を滿たしめるのは、取りもなほさず御利益のうちである。

八、庚申様

毎年秋になると、田舍の農家では庚申待と云つて、近所合壁の人々が寄り集つて、

庚申様

一晩中飲だり食たりして、騒ぎ明す、十干十二支の配當から出た日を祭るので、本地本佛、釋迦牟尼佛も、こんな頭も尻もないやうな佛様は知らないと仰有る、お經の本にも書いてはない。

無い譯だ、知らない譯だ、御釋迦様の知らない間に、支那の閑人と、日本の惡戯坊主とが、私通して拵へた佛様だもの、私生子である、お釋迦は認知しないから庶子にも無れない、そのせいか、どうもこの庚申様を祭つた堂は、乞食の雨宿になつたり、怪物が出現して人身御供を食つたり、村郎野嬢が逢曳の宿をしたり、泥棒の宿をしたり、あらゆる罪惡が行はれる。

上州の庚申山に、夜な〳〵現はれた山猫の怪物は、赤岩一角と云ふ武士を喰ひ殺して、一角に化けて、一角の妻を奪ひ、一角の子と嫁の財産を奪つて、人間交際をしてゐた所、犬飼現八と云ふ強い男に見現はされて射殺された、とかく庚申山だの、庚申堂だのと云ふ所はロクな事はありやしない、元來、庚申様が神様だか佛様だか分らない所から、世間から馬鹿にされてこんなことも出來るのである。

十干十二支といへば、勿論支那の古くさい學者が考へたことで、庚申といふのは、その六十一日目に廻つて來る日である、それが日本へ入つたのは天台宗の智證大師といふおせつかい坊主が、支那から持つて來たので、唯漠然庚申祭といつたのでは何だか正體が無くて分らぬと云ふので、天台宗の坊さんたちが寄つて集つて、考へたのが猿田彦の命である、庚申の申と、猿田彦の猿と、國音が同じなのをいゝことにして引ぱり出したのである。

天孫瓊々杵の尊が、天照皇大神の命をうけて、豐葦原瑞穗國を統治すべく天降つた

時に、道案内を承はつたのがこの猿田彦命である、申と猿と國音が似てゐるだけでは面白くないと云ふので、この猿田彦を佛法守護の帝釋天の使者、青面金剛の化身だと云ひふらした、そこで猿田彦は何時の間にか庚申様になりすまして終つた、そして庚申様は何時の間にか、道案内の神となつて道祖神で通ることになつて、國々の道辻に庚申塚が建てられる次第となつたのである。

いはれを聞いて見ると、餘り有り難い佛様では無い。

九、大黒天

辨天様も大黒様も七福神だなどゝいつて、神様の領分に封じこめられてゐるが決して神様ではない、正眞正銘の佛様である、日本の坊主や支那の閑人が寄り集つて拵

大黒天

へた出來合の佛様とは雲泥の相違であるんである。

辨天様のことは前に述べたが、同じ七福神の中に數へられて、神様と間異へられてゐる大黒様は、本來摩迦羅大黒といつて、昔は大摩尼珠如來と申す、所が、世の中の人が金を欲しがるので大慈悲心を起して、大福德圓滿自在菩薩となり、更に大黒天となつて、打出の小槌で金を叩き出す役目を引き受けた。

この佛様の名を呼び、或は五尺三尺、五寸の木像で刻んで、伽藍に安置して崇敬するならば、七世の天女、八萬四千人の福德人が來て、お金を澤山授けてくれると、お釋迦様の書いた御經の本の中にちやんと書いてある位、それ程御利益の多い方である。

この大黒様と、大已貴命を一所にしてゐるのは、やはり、日本人の細工である、大已貴命は、後に大國主命となつて、出雲の大社に鎮座ましまして、男女緣結びの神様と崇められてゐる、大黒天は印度の傳說が生んた、福德圓滿、慈悲の相を備へた佛様であつて、全然別ものである。

この福德圓滿の大黒天を袖にして、ビリツケンなどゝ云ふ貧相な出來星福神を祠るから、日本も米騷動だの、暴風雨だの、毎年々々祿なことはありやしない。

一口に大黒様と云ふが、實は比丘大黒、夜叉大黒、伽羅大黒女、王子迦羅大黒、信陀大黒、三面大黒の六大黒の區別があつて、何れにしろ福德の本家である、圓滿慈悲の本元である。

お寺の梵妻を大黒といふのは、けだし大黒様が、金錢を打ち出す世界人類の會計方であるが如く、梵妻は寺の會計を取りしきつてやる故であるかも知れないが、それは

著者の保證の限りでは無い。

一〇、聖天様

象頭人身の怪物が、佛様の仲に交つてゐるに至つては、言語同斷沙汰の限り、お釈迦様の方便も、斯うなつて來ると、一層人を愚にし、自からの愚を現はすやうなものだ、聖天様とその佛様が、いふ象頭人身の化物である。

無智な、三千年も四千年も、何萬年もの昔の人間を相手だから、頭が象で、身體が人間だなぞと云ふ得體のわからぬ化物でも、佛様にして崇めてはゐるけれども大正の今日になつて、若し日本へそんな佛様が來たら、それこそ小利巧な奴が捕捉まへて見世物を興行して、鼻の下建立の料にするかも知れない、お釈迦様も飛んだものを拵へたものさ。

然し、印度では象を百獸の王としてゐる、象が一番有用な、そして巨大な、有力な柔順な獸である、印度人が象を愛し象を尊敬し、象を使役することは、丁度日本の馬のやうである、故に、この象を佛化して聖天様としたのは、無智な此の時代の人民としては餘程考へたものに違ない、鰯の頭も信心からといふ、印度のことばかり惡くは言はれない、日本にたつて隨分御神體の分らぬ神様もあるのだから。

東京は淺草橋場にあるのが、日本では名高い聖天様だが、その聖天様を、花柳演藝界の人々が信心するのは一體どういふ理由か知らないが、元來此の佛様は、大聖歡喜天といつて、一切の善事を成就し、一切の災禍を滅却するの御利益があるので、僞八百、手練手管で欺したり欺されたりする花柳演藝界の人々に御利益を與へるかうど

か、そこの所もちと受合しかねるといふもんだ。

一一、達磨大師

禪宗の元祖、達磨大師は、本名菩提達摩と云ふ、印度香主國王の第三子、出家して般若多羅尊者について佛法を修め、五印度を教化すること六十年、後、支那に渡つて佛法を傳へた所を見ると、手も足も立派についてゐたものと見える、後世日本に傳える繪姿が、目玉の多きい、頭の禿げた、手も足もない鬚男に書いてあるが、それは例によつて僞である。

綱渡りや梯子上りの輕業の藝當をしたり、煙草屋の看板になつたり、火吹き達磨になつたり、冬は雪の中へ突立つて子供の玩具になつたりするのも、宗門相傳、門外不

達磨大師

出の修法の一つかも知れない、御苦勞樣な次第である。

多くの佛樣は、象頭人身だの、千手千眼だの、三面六臂だの、得體の分らぬ怪物の片輪物たが、この達磨大師だけは正眞正銘の人間の子、五體そろうた立派な人間でありながら、佛法を信じて、凝り固まつた爲に、手も足も出なくなつたと云ふ所からあんな繪姿を書かれるやうに成つたのかも知れない。

日本でも、鎌倉あたりに出店を開いて、受賣をやつてゐるが、政治家だの、文學者だのと云ふ、ちよつと毛色の變つた連中が參堂して、坐禪三昧、問答三昧、悟り濟した顏はしてゐるけれども、やつぱり金は欲しい、女は欲しい、名譽も欲しい、禪が聞いてあきれる、問答無益、喝だ。

中には禪學令孃などゝ云ふ、文學士の小說家と鹽原へ逃げ、それから更に若い燕の繪師と共同生活をしながら、原始女性は太陽であつたなどゝ、途方もないことを吹きまくつてゐるが、とう〳〵母さんになつて、

『禪の妙諦は日常生活のうちにあるわ』

などゝ悟つて終つたのもある。

大分むづかしい問を出して、參禪の僧俗を困らせる釋某といふ高僧が、御自分では煙草がやめられないと云つて、俗物大浦兼武に嘲笑された、問答無益だ、著者はそんなお宗旨はきらひだ——六百年の昔、日蓮と云ふ英雄僧が『禪天魔』と獅子吼したが、けだしその邊の消息を嘲けつたのかも知れない。

何千年の昔の、支那といふ悠長な國に生れた人なら、面壁九年、お尻が腐つても差支ないけれども、大正の日本では坐禪だの問答だのといつて、座り込んだり考へこん

だりしたつて、何が佛果が得られるもんだ、坐禪したり問答したりする前に、まづ御自分の內心を顧みなくちやならない。

坐禪せば四條五條の橋の上、往來の人を深山木にしてさ、何も一室に閉ぢ籠つたりわざ〳〵鎌倉へ行かなくつてもいゝ、せつせと自分の仕ごとをしてゐるのが、本當の禪定と云ふものだ、面壁禪坐九年といふのは、誰でもが左樣しろといふのではない、尻も足も腐る位、自分の志した仕事に從事しろと云ふ敎だ、はき異へては不可ない少し位の失敗や困難に逢つて最初の意志を飜へしてはならぬと云ふ意味だ、達磨の異名を不倒翁と云ふのも、まつたく此の意味に外ならぬ。

ある地方へ行くと、淫賣のことを達磨と云ふが、これは如何いふ譯だかまだ調べて見ない。

一二、帝釋天

柴又でお馴染の帝釋樣は、佛說に依ると、六欲天の第二天、忉利天にあつて佛法保護の職務に從事してゐる大將軍である、佛敎界の征夷大將軍といつた格である。

六欲天の第二天、忉利天なんて何所にあるか分りやしない、これも例に依つてお釋迦樣の口の先から生れた佛樣である、何でも釋迦如來御降誕の時、天上に在つてこれを守り、後には迦毗羅國の宮城を出て、檀特山へ修法に行くときには部下の四天王を引率してこれを保護し、一夜に一千三百餘里を步ましめたと云ふ神通自在の佛樣で、かつ亦、お釋迦樣の生母摩耶夫人が、死んで後天上に生をうけたのをその后妃にしてゐると云ふのだから、お釋迦樣とが緣が深い。

須彌山の頂上、善見城の城主として天上に覇を稱してゐる、秦の始皇帝は三千人の美女を宮妃としてゐたといふが、此の帝釋樣は、四十九萬四千九百の正妃があつたと云ふのだから、それこそ本當に天上天下唯我獨尊だ、英雄色を好むと云ふのは、人間界のことばかりでは無いと見える。

下界の日本では、やれ久原が一夜二十萬圓を投じて宴會をしたの、山本が虎狩をしたの、山下が百萬圓を海防費に獻金したの、後藤男の麻布御殿が素晴らしいの、何のと云つてるけれども、どうして〳〵此の帝釋樣に比べると、日本の成金なんぞあ物の數では無い。

その居城善見城のうちに、帝釋天の宮殿は、七萬七百の室があり、一つの室に七人の天女がゐて、一人の天女が七人の侍女を召使つてゐる、その宮殿の周圍は四の大公園があつて、一は衆車苑、二は麤惡苑、三は雜林苑、四は喜林苑といつて、件の天女が遊覽すると、車駕が出たり、歡喜に滿ち、喜樂に滿ち、無限の極樂境で、帝釋樣はこの大公園に、花のやうな天女を五十萬人、その他三百五十萬人の侍女を遊ばせてそれをやにさがつて見て居るのだ、エヘヘン〳〵、よだれなんぞ流しちや不可いぞ。

一三、摩利支天

摩利支天は、帝釋天の眷屬で、日天子の軍に從つて四天下を巡行して、國を護り民を守り、五穀を養ひ、兵戈の難を救ふと云ふので、日本では農神として崇められて居るやうである。

大黑天、辨財天と、この摩利支天を、佛敎守護の三天といふ、大黑天と辨財天とは

前に述べた如くで、摩利支天の功德は、怨家の恨みを受けぬと、摩利支天經に書いてある、正直に言へば、摩利支天を信仰すると、其の人を見ることも知ることも出來ない、從つて害することも出來ぬ、攻めることも出來ぬ、惡いことをしても捕へられない、負債があつても請求されない、人を殺しても殺されない、といふ、調法なお利益があるので、鼠小僧だの、石川五右衞門だのは、摩利支天の大信者であるかも知れない。

何が怪しからぬと云つて、是程怪しからぬ佛様はない、別名陽炎と云ふ如く、影も形も見えない、厄介千萬な佛様である、金に困つたら、早速御臘でもあげて、何所高利貸からウンと金を借りて來ると、お利益空しからず、返さなくつても濟むかも知れない、無智蒙昧な時代では斯やうな怪しからぬ功德を施す佛様も見逃されたが、大正の今日ならば、早速治安妨害の件に依つて重懲役に處せられて、鐵窓へ投り込まれること受合である。

佛様の御眷屬から縄付を出したとあつちや、甚だ名譽である。

一四、布袋和尚

日本人のめちやくちや加減も大がい呆れかへる、布袋和尚と自から名乘る坊主を寶船へ乘せて、七福神の中に祭り込むのだから、無茶も茲に至つて極れりと言ふべしである。

辨財天とか、大黑天とかいふまぎらはしいのならば、そりや戸迷ひして神様の中へ入り込まうかも知れぬが、假にも和尚と稱する布袋坊主を神様の中に交つてるのを氣

がつかないとは、去りとは呑氣千萬である、布袋和尙も布袋和尙だ、こりやちつと畑がちがふわいと思つたら、神樣たちの中から遠慮して引退ればよいのに、大きな顏をして大きな腹を突き出して、洒蛙々々座りこんでるなんぞあ、ほんとうにほてい（太い）和尙だ、さうだ分つた、この乞食坊主、いゝ年をして主ある女の辨天樣に氣があるんだな。

ギリシヤにダイオヂニースと云ふ賢人がゐて、桶の中に入つて、桶をころがしながら生活してゐて、絕世の英雄アレキサンダーをさへ手古ずらせたが、この布袋和尙はこの桶に輪をかけた物臭坊主である、常に一本の杖で布の袋を擔ひ、人の門に立つて布施を受けると、味噌も糞も一所にしてこの袋の中へ入れた、腹がすくと袋の中から貰つた食物を出して食ふ、雨が降ると草履であるき、お天氣になると下駄を履いて歩いたといふツムジ曲りである、支那の浙江省あたりの大昔の坊主だつたから構はないやうなものゝ、今時こんな坊主が、そこらを歩つて見王へ、早速こわい叔父さんが、ちよつと來いと本署へ引ぱつて行つて、十日位の拘留は默つてゐても食はせられる。

本名は長汀子、寧化縣、岳林寺の住職であるが、袋を背負つて歩くので、世間の人が布袋和尙と言つたのである。

一五、阿修羅王

佛敎の說く所に依ると、此の宇宙には六の世界がある、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人道、天道の六道を言ふのである。

その內に、修羅道といつて、年から年中戰爭ばかりしてゐる、恐ろしい世界がある

七度び生れ變つて尊氏を亡すといつた楠公だの、義經だの、豊臣秀吉だの、織田信長上杉謙信、武田信玄などゝ云ふ人の死に行く世界である、三度の飯を食ふかはりに、日に三度づゝ戰爭をしてゐると云ふのだから、獨逸のカイゼルだつて尻尾を捲いて逃げねばなるまい、何れカイゼルなどもこの修羅道に落ちこに相違ない。

その修羅道の御大將が、即ち阿修羅大王である、生れながらにして强惡無道、箸にも棒にもかゝらない男であつた、その形醜陋にして酒を好むと云ふのであるから、そんじよそこらの實業家や政治家の中にざらにその見本がある。

講釋師が、扇を上段下段に振り廻して、高座の上で、阿修羅王の荒れたる如くなんどゝ、見得を切るのは、この修羅道の爭鬪のはげしさから思ひついて、人間の暴れものを形容したのである。

やつぱりこれも講釋師の張扇から叩き出される敵討物語に、『修羅の妄執を晴すべく長の年月の艱難辛苦』などいふ語がある、これは思ふに、人手に掛つて非業の最期を遂げたものは修羅道へ落ちる、それが孝子義士に敵討を取て貰ふと、修羅道の苦患を救はれるので、そこで左樣いふ言葉が出たのかも知れ無い。

一六、文珠菩薩

佛樣も澤山ある、浪花節の文句ぢやちいけれども、何れをそれを引きぞわづらふ花菖蒲薄、優り劣りは無いが、就中この文珠菩薩は第一等の智慧者であると稱されてゐる。

本地本佛、三界六道の教主、衆生濟度の能化、世尊と自稱して大にゐらがつたお釋

迦様が、智恵の權化だと推讃する位の佛様だから、この佛様は餘程利巧であるに相違無い。一代の才人として知られた柳山人の寺子屋の主人のやうだ。

けれども然し、日本の諺に『三人寄れば文珠の智恵』といふ位だから、餘り大した智恵でも無いらしい、十人二十人、三百入五百人、千人萬人寄つても文珠の智恵に恊はぬと云ふのならば、智恵の權化と仰せられても本當らしく聞えるが、三人位に相當する智慧で、智慧の權化も凄まじい。

それでゐて、佛様仲間の先生格だ、諸佛發心の師、般若晴慧の母だなんど丶威張つてゐたが、口の惡い、智慧者の多い日本へ渡來しては、たつた三人位にしか通用しないので、ちとまご付いて御座る、印度のやうな野蠻な國では、井の中の蛙大海を知らずで威張つてゐたが、さて大海を乘り出して日本へ來て見ると、いやはや窘めつたらしいこと夥多しい、御氣の毒千萬な次第で御座る。

阿彌陀様の第三番目の子で、普賢菩薩は、此の佛様の弟であるさうなが、例によつてお釋迦様の申し子であることは勿論である、右手に劒をとり、左手に書卷を持つて蓮華上で說敎する、歩くときは獅子に乘つてる所なぞは白痴おどかしの徹邊、そんな所から智恵者と見られたのであらう。

一七、十六羅漢と五百羅漢

佛様を信心して、髮を剃つて佛弟子となると、阿羅漢果を得たと云ふ、羅漢とは阿羅漢果を得た所のお迦迦様のお初弟子である。

十六羅漢は十六の佛弟子、五百羅漢は五百の佛弟子であることは勿論である、五百

羅漢を名を一々記すのは、一休のやうな坊主も難しとする所である、また一々これを覺えてゐた所で御利益がある譯ではない。

十六羅漢でさへも、阿彌陀經と法住記と二通あつて、何方が本當か分らないさうだから、こんな曖昧な佛様を拜んでも御利益はありはすまい、しかも、この羅漢たちは佛勅をうけて、封命無量、永く現世に住して正法を守護すると云ふのだが、これもしかと本當のことは分りはしない、元來僞も方便で、世界第一の天僞つきのお釈迦様の御弟子のいふことだから、上を眞似る下で、何が何やら分つたものぢや無い。

一八、牛頭天王

名に呼ぶ如く牛頭の天王様である、諸行無常の鐘をつき出すので名高い祇園精舎の

その鐘の番をしてゐるのが、この牛の頭をしてゐる天王様である。

象頭だの、牛頭だの、お釈迦様も隨分と奇怪な守護神を拵らへたものだ、やつぱり無智な善男善女を頭から脅かして、佛敎に引き入れやうと云ふ、大それた魂膽があつたからである。

所が、又日本に弘法大師と云ふ惡戯坊主があつて、本地垂跡の説などを建て大分佛様と日本の神様とを混同して、異身同體だとか、化身だとか、分身だとか言つて、神道國の日本人を佛敎に引き入れやうとした、その時に、この牛頭天王も祇園精舍から引張り出されて、八阪神社の祭神に祭りあげられて終つた、そして曰くが振つてる、牛頭天王が、日本へ生れて素盞鳥尊となつたのだと大層もないことを言ひ振らして、それが一般に信ぜられるやうになつた。

牛頭天王も迷惑ならば、素盞鳥尊も迷惑だ、蛇の頭をきつて叢雲劍を拔き出したからつて、何も牛の頭の天王と一所にしなくつてもよい。

一九、虛空藏菩薩

大集經と云ふ御經の本によると、虛空藏菩薩の本願は、一切衆生に智惠を授けることであるさうな。

そこで、大聖日蓮、まだ蓮長といつて房州小湊の清澄寺にゐた頃、湯水を斷ち食を斷ち、御堂に籠つて祈念すること三七二十一日に及んだ所が、滿願の日の曉天に、虛空藏菩薩が姿を現はして、日蓮に智惠を授けたと云ふことであるが、その眞僞の程は分らない。

虛空藏樣に祈願を籠めれば、智惠が授けられるならば、何も高い學資を拂つて大學だの、外學留學のといつて勉强しなくもよい譯だ、虛空藏樣の御堂へ日參してゐれば博士となり大學教授となることは雜作はない、大學の特待生になつて、銀時計を頂戴して、富豪のお智さんになつたり、美人を妻君にしやうと思ふものは、何もノートを首つ引で勉强するが如き迂濶な方法を取らなくも、虛空藏樣を信心するがよい

日本でも、學校は少ないし、學生は增加して來るし、あるだけの學校では、限りなき學生を收容することが出來ないで困つてゐる、全國各町村の、歲出費の殆んと三分の二は教育費である、この教育費がなかつたらば、日本はどれだけ國富を增すか分りやしない、商業の發展だの、工業政策だのといつて、積極的に財政を處理するよりはいつそのこと全國の學校をみんな打ち壞して、教育といふことを全然よして終ふ、そして各町村に一個づゝ、虛空藏樣の御堂を拵らへたら如何だらう、教育費が不用になつて、それで人間が利巧になるのだから、天下これ程德用なことは無い。

虛空藏菩薩とは、實相無相の眞智惠を有すること無盡藏の佛樣である、恰かも虛空の物を藏して限りなきが如しと御經に書いてある位だから、誠に以て廣大無邊の智惠である、此の欲に虛空藏菩薩と仰せられるのである。

二〇、俱利迦羅明王

昔々、江戸の名物は喧嘩と火事と、さうして喧嘩と火事には無くてはならぬ俠み肌の哥兄であつた、何ぞと云ふと、片肌ぬいで、尻をまくつて、

『斯う見損なつて貰ひますめえせ、男は氣で持つて言ふんだ、べらんめえ、何でえ、

三度の飯は四度食つても喧嘩は廢められねえ、矢でも鐵砲でも持つて來い、間抜野郎め』

と、二言目には野郎呼はり、

その片肌ぬいだ脊中から二の腕から、尻のあたりまで、さても彫つたり、黑龍、劔に纏はつて、赤い火焔の中を躍りながら昇天する刺青の見ごとさ、それが倶利迦羅明王の御本體だと、佛敎の方では言つて居る。

何とも恐れ入つた佛様である、元來お釋迦様は、この倶利迦羅明王を、不動様の法力を現はして活動するところの形であると仰せられたが、まさかに日本へ渡來して、俠客の脊に巢を食つて、それ喧嘩だ、それ火事だと云つて飛び出さうとは御存知なかつたと見える。

降魔の利劔が、喧嘩の得物を現はし、火焔は火事、龍はこれ雲を呼んで雨を降らして火を消す、喧嘩と火事を名物とする江戸つ子の哥兄が、倶利迦羅紋々を脊中に背負あるのは、何さま面白いことたが、殘念なことには今日では刺青は御法度たから、この明王様の御尊像は中々拜まれない。

二、普賢菩薩

白い象に乘つて、綺麗な顏立の坊さんがある、それが普賢菩薩である、阿彌陀様がまた佛様にならない前に、その第八の王子として生れた、佛様中の智惠を一人で背負つて立つてゐる文殊菩薩は此の佛様の兄さんであるさうな。

諸佛最賢の故に賢と云ふのだから、この方も兄さんに劣らぬ智惠のある佛様に相違

ない、何時でも兄の文珠菩薩と二人で、阿彌陀様の左右につき添つて、智、慧、證は兄が引きうけ、悲、定行は弟が相續してゐるから、阿彌陀様はまあ樂隱居といつた格で納りかへつて御座る。

俗間には普現の菩薩といつて、何所へでも普く出現し、何者にでも普く姿を出現して、法を說き敎を述べられる、三十三身に現じ、十九說法をすると云ふのだ、實名は三曼多跋陀羅と、立派にお釋迦様の付けた名があるのだが、此の故に普賢菩薩と申し奉る。

遊女や、藝者を歌舞の菩薩といふのは、普賢菩薩が肉身に現じて、浮世の衆生に御利益を與へるのだと、さる坊主がいつたが、それは方便だ、本當は、普賢菩薩も美くしい、遊女や藝者も美くしい、そこで遊女藝者を菩薩と稱するやうになつたのだが、

普賢菩薩

今の遊女藝者たちには、菩薩顔したのは虫眼鏡でゝも探さなくつちや見付からない、大がいまあ、その、何だ羅漢様のやうに醜面……いえさ、生理的の美人が多いと云ふことさ。

二二、日天子

何かにつけて抜目のないお釈迦様は、太陽を引張り込んで佛法守護の眷屬に祭りあげてゐる、日天子と云ふのが今日の太陽である。

お釈迦様もいゝ加減なことを言つたもので、今日、科學の進歩した時代に、太陽は十二衆天の一人で、四大天王に屬し、帝釈天の内臣であつて佛教守護の役目であるなぞといつたら、それこそ理科大學の教授たちから、苦情が出て、お尻に帆をかけて印度へ逃げて行かずばなるまい。

まして、多情な帝釈天の子分たけに、宮妃が澤山あつて、外出の時には二妃を左右に侍せしめ、七寶の車に乘り、八頭の馬を牽き、七曜九星が前後を守護してゐるなどゝ言はふものなら、神經過敏な内務省から説教禁止の命令が出るのはきつと受け合ひである。

もつとも太陽がなかつたらば、人間も生きてはゐられない、萬物も成熟はしない、從つて坊主も生きてはゐられないから、太陽が佛法守護の神様であることだけは僞では無い。

二三、月天子

十五人の乙女に赤い衣を着せて舞はせ、十五人の乙女に黑い衣を着せて躍らせ、それを見ては悅に入つてると云ふ鼻の下の長い神樣が、月天子といつて、月宮殿の王樣である。

日天子と同じく四大天王の眷屬で、佛法守護の神樣であるが、こんな鼻下長に佛敎が守護出來るかしらんと疑ひたくなるぢや無いか。

やつぱり、三明六通を得て、三千世界を觀通すると自稱するお釋迦樣が、例の知つたかぶりで、デッチ上げた神樣で、何のかのとむづかしいことを言はなくつても、日本では月讀の命で通つてゐる、お月樣のことであるのは申す迄もない。

歌に讀まれたり、詩につくられたり、文に小說に、お月樣程人氣のある方はない、幸福な方さ、だが、よく亂暴な奴は人に恨みをかへすのに、

『月夜の晩ばかりぢやねえ、闇夜の晩もあるんだ、覺えてゐろ』

などゝ啖呵を切つて、大變このお月樣を邪魔物扱ひにする、忍ぶ戀の、若い男女にも、どうかすると無いがしろに取り扱はれることもある。

月の出ない闇の晩には、よく罪惡が行はれる、强盜、殺人、窃盜、何れにしても月のない晩が多い、して見ると、佛敎は勸善懲惡の敎だから、月が每晩でも出て、そんな罪惡の後を絕つ方がいゝのだ、依つて以て考へると、三十人の天津乙女に舞を舞はせて脂下つてゐても、それでゐてお月樣は佛法守護の役目が努まつて行くのだ、ちと肯かりたいものである。

二四、金剛夜叉王

金剛力士と云ふ位、餘程力の強い人であつたに相違ない。

千二人の兄弟のうちの、その千二人目の末の子である、千二人もの澤山の子供を持つてる位の、恐ろしい精力の絶倫な王様の子だけに、此の人も絶倫の強力を持つてゐたものと見える。

三面六臂と云ふのだから、ちよつと人と變つてゐる、それで燃え立つ火焔の中に足を踏ばつて突立つてゐる、金剛力士の突立つたやうだと形容するのは、此の人の形相から出たので、何さま強かつたに相違ない。

東西南北、中央の五方のうち、北方の守護に當つてゐる人である、所謂北面の武士と云ふのは、此人から初まつたのである、お釈迦様も、知らざる所なく見ざる所なく通せざる所なき程のゑらい佛様たつたけれども、斯ういふ強い人を味方に引ずり込んで佛敎の守護をさせた所を見ると、口程豪くはなかつたのかも知れない。

金剛夜叉、または執金剛、金剛手、あるひは金剛密迹天などゝ云ふ難かしい名前がついてゐる、中央を守護する不動明王、東方を守る降三世明王、西方の大成德明王、南方の尊茶利夜叉明王と、この北方守護の金剛夜叉明王とを合せて、佛法守護の五大明王とも、五大尊とも申しあげ奉るのである。

千人の兄貴が發心して佛様になつた、すると、千一人目の兄貴は、ちとつむじ曲りで、人の眞似をして佛道を修行するのは面白くない、おれは惡魔になつて、兄貴の邪魔をしてやる』と、兄弟は他人の初とはよく言つたもので、とう〳〵惡魔になつて、兄貴達を窘めてゐる、そこで末子の金剛夜叉は、『それぢやおれは力士となつて兄貴たちを救つてやらう』と言つたのがそも〳〵で、お釈迦様の御見出しに預かつて、佛敎

守護の大任を仰せ付けられるやうになつたのだと云ふことである。

だから、全體なら角力の神様は金剛夜叉明王でなくつちやならないのに、如何いふ譯でか、摩利支天を祭つてゐるので、北方の妙高山の頂上で、この明王どの、日本人は物を知らないと云つて苦笑してゐるかどうだか、そこまでは著者も行つて見ないから分らない。

二五、吉祥天女

吉祥天女といつて、鬼子母神様の娘で頗る付の別嬪であるが、惜しいことには行儀が惡いので、美人のお株を辨天様に奪られて終つた。

御亭主のある、非賣品の辨財天女にやい〳〵云ふよりは、少し位行儀は惡くつても

別嬪の娘の、吉祥天女を信心した方がどれだけ難有味があるか知れやしないのに、どうしたことか、日本では辨天様ほどに持て無い、美人が通ると、

「よう、生辨天！」

と、、よだれを流して後を見送る世の中の男といふ男ども、

「あの娘はいゝ女だ、美人だ、丸で吉祥天女の再來のやうだ」

とは褒めないやうだ。

茲に至つて知る、儘にならぬのは浮世ばかりではない、運不運は人間にばかりあるのでは無い、俗界を離れた佛様の世界でも、運不運は免かれないものと見えて、この吉祥天女なぞは、折角の美人でありながら、持つて生れた運が惡いばつかりに、餘り信心されない、いえさ、餘り流行ない佛様である。

もつともそれも、母さんの鬼子母神が人の子を取り殺した報ひで、親の因果が子に報ひと云ふ、その證據を目前に見せるお釈迦様の方便かも知れない、何はとまれ、お氣の毒千萬である、今の日本へなぞ生れて見王へ、辨天様そこのけと云ふ勢ひで持てるに相違ないと思ふ。

毘沙門様の妹で、最勝園といふ御殿に住んでゐて、寶冠を頂いて如意寶珠を持つて、石臺上に扶座してゐると云ふのだから、御行儀が惡かつたに違ない、何しろ、鬼子母神の獨り娘で、我儘一ぱいに育てられたのだから、子供の時に始末に終えない御轉婆娘だつたさうだ。

近所の女子供では相手に足りなくつて、年上の男の、それも我利々々の亂暴者と一所になつて暴れ廻つてゐた、お母さんの鬼子母神も、さすがに心配したと云ふ位の暴れやうだつたのだから、依つて以て如何に御轉婆だつかかゝ分る、身體に生疵のたえたことが無く、近所合壁の子供はいつも窘められて泣かせれて、終には遊び相手がなくなつた、そこでお釈迦様か布敎にやつて來ると、この生臭坊主、何をいふのか知らん、下らないことを言つたら、捕捉まへて打なぐつてやらう位の意氣で、出かけて行つたところが、如何して〳〵打つ所ぢやない、一點の非もない、恐れ入つて佛に歸依したと云ふ女である、たゞしその眞僞は知らない。

然し、御母様の鬼子母神も持て餘した位のお轉婆娘であつたのが、お釈迦様の敎を聞いてから、飜然として悔ひ改めて、生れ變つたやうに温順しく成り、須陀含果を得て、威德成就衆事大功德天と云ふ立派な天女に生れたと、金光明經と云ふ本に書いてあるから、これだけは本當であるだらう。

素的な美人で、まだ獨りものだ、それでおまけに衆生に福德を授けるのがこの佛樣の、お釋迦樣から仰せつけられた役目である、辨天樣を信心するよりは、吉祥天女に御參詣をした方が餘程お利益があるやうだ。

南無吉祥天女、願はくば美人の妻君を授け玉へ、成金にならしめ給へ――せい〳〵御賽錢をあげますから。

二六、醫王藥師如來

藥師樣は、眼病を癒して臭れる佛樣だと、一般に信じられてゐるのは、如何いふ理由かと云ふと、藥師如來、くはしく言へば藥師瑠璃光如來と申し奉つるから、そこで眼病で物が見えないで暗くなつてる人間に光を授けて下さると云ふ意味合があるのかも知れ無い。

阿彌樣陀は四十八願といふが、此の佛樣は十二願を立てゝ、衆生濟度を誓はれた、第一が光明照耀、第二が身如瑠璃、第三が愛用不盡、第四が大乘安立、第五には三聚具足、第六には諸根具足、第七には衆患悉除、第八には轉女成男、第九には安立正見第十には繫縛解脫、第十一が餓饉安樂、第十二が衣服嚴具と云ふのだから、人間の身體に關したことは何から何まで行ないことは無い。

就中、第七の本願は衆患悉除と云ふ位、そこで藥師如來と申すのであるかも知れない、第一に光明照耀とあるのだから、眼病治癒はその專門の御勤めであるかも知れない、そこで眼科、內科もやると云ふことになる、第八に女を轉じて男と成すことも出來るのだから、是は產科婦人科の醫術も卓れてゐる譯である、藥師如來といふのも誠

に故あるかなで、別しては大醫王佛とも申す。

須彌山の東方、瑠璃光土と云ふところにゐて、患者の診療に從事してゐるが、さすがの藥師様でも、匙を投げる場合がないとも限らぬ、そこで、藥師の八菩薩といつて文珠、觀音、勢至、藥王、藥土、彌勒、無盡意、寶檀華香の八人の佛様と連絡を取つて置いて、藥師様の醫術でも療らない病人を、冥途へ連れて行つて貰ふのであるさうな。

僞だと思つたら藥師經といふ御經の本を見給へ。

『世尊、藥師瑠璃光如來の名號を聞き、命の終るときに臨み、八菩薩有りて、神通に乘じ來りて其の道を示す』

と書いてある。

昔から、醫者の棄てたものは、坊主が拾ふのは世間の定法であるけれども、日本の名醫大醫といふ人がいかに商賣に拔目が無くつても、まさかに自分の見離して匙を投げた病人を、お寺と連絡を取つてお葬式の紹介までする者は無い、今に段々左樣なるかも知れないが、今の所では先づ以て見當らない。

そこへ行くと藥師様なんざあ圖々しいものだ、自分で見た患者を、もう駄目だと云つて友人の佛様に世話をしてやる、正直で善いといへば善いかも知れぬが、はゝあ、聞えたな、藥師様、醫者ばかりでは立ち行かれないと見えて、葬式の世話をして幾何かのコンミッションを取るのだらう、八人の佛様に連絡をとつてをけば、八人が八人で競爭だ、自然コンミッションの多い方へ……ヱヘン、これは失言、冗談です。

コンミッション流行の大正の日本の、そんじよそこらの慾の深い連中が、我が心に

比較して、清淨な藥師樣の心を忖度したものである。

佛は醫王の如く、法は良藥の如しといふ、人間の心の病氣は、佛樣と云ふ醫者が、法と云ふ良藥を用ひて是を治療すると云ふ意味であるから、佛樣はすべて醫王であるが、とりわけて藥師樣は佛中の醫王と云ふ譯から、一口に醫王藥師如來と稱し奉るのである、藪醫者の門前は雀羅を張るといふが、藥師樣は名醫と見えて、何時もお賽錢がたんまりあがつてゐる。

二七、阿羅邏仙人

傳說に依ると、お釋迦樣が榮耀榮華の生活を捨てゝ、出家得道して、まづ第一に敎を乞ふたのが、阿羅邏仙人であると云ふ。

中印度、王舍城の北方一千三百里、檀特山にゐたと云ふが、學者は彌樓と云ふ、諸般の欲を棄て、戒律を持し、坐禪と難行苦行を以て、眞理の畢竟に達し得ると信じてゐた極端な禁慾主義の哲學者であつたのである。

頭に須彌の雪を頂き、面に蒼海の波をたゝみ、身に木の葉の衣を纏うて、眼を閉ぢて寂莫としてゐたと云ふのだから、先以て日本の繪に出て來る仙人だ、水を汲むにも方式があるといつて叱り、火を燃すにも法があると云つて打ち、隨分と固苦しい修行をさせたさうだ、その結果お釋迦樣は三度生を變へて、心身まつたく淸淨となり、闇中に光を放ち、鳥語獸語を聽き、三千世界を見渡すと言ふ大層もない豪い人になつたと書いてあるが、それは僞八百、さう云ふ風にあらゆる難行苦行をして法を修めてもどうも安心がならないので、程なく阿羅邏仙人のもとを辭して他へ行つたのである。

大したゐらい人ではなかつたらしいが、お釋迦樣を敎へたことがあるといふのが此の人の幸福、とんだ所で名前を賣つたものだ。

二八、耆婆

耆婆、扁鵲が手をつくして診療しても、とても此の病人はなほるまい――などゝ、藪井の竹庵先生が、自分の技術の末熟さを胡麻化すために引張り出して、辯解のタネにしてゐる。

耆婆も扁鵲も、醫者であるが、就中耆婆は、お釋迦樣に依つてその妙技を推稱されて、爾來めき〳〵賣り出した印度の佛樣である、扁鵲は支那のお醫者樣で佛樣には關係が無いから、申上げる必要はないとして、さて、此許御紹介致しますのは印度の名醫耆婆である。

何さま、藥師樣の申し子でゞもあつたと見えて、生れた時に針筒と藥袋を持つて母親の腹を飛び出したと云ふ、お產に苦しんでゐる母親さんに氣つけを呉れたり、自分でまくりを呑んだり、臍の緒を切つたり、重寶なことである、その位の生れながらの名醫でありながら、どうしたことか母親さんに死に別れて繼母の手に育てられたのである、多分藥を盛り損なつたのでもあらう、或は、生れながらにして持つて出たと云ふ針に刺されて死んだのかも知れない、元來大將のお釋迦樣からして生れるときの癖が惡いんだから……。

印度國、頻婆娑羅王の子であるが、繼母に憎まれて塵芥溜の中へ棄てられた、おぎあ〳〵泣いてゐるのを、通りがゝりの無畏王が拾ひあげて育てた、實母が弱くつて死

別れたり何かしたので、人間の死ない方法もないものか――などゝ、途方もない考を起して、そこで醫者になつた。

お釋迦様は、母の摩耶夫人に死なれて、人生を悲觀し、精神的に不老不死の方法を發見すべく佛敎と云ふものを拵らへかけたが、この耆婆は、肉身其の儘で病氣になつても死ない術もがなと思つて、それでお醫者様になつたのだが、人間と生れては、死は免かれない運命と悟つて佛の敎に歸依した、いつくら名醫でも、定まる壽命は仕方がない、この點から見るとお釋迦様の方が少し利口であつた。

二九、訶梨帝菩薩と鬼子母神

その聲で、とかげ喰ふか時鳥である。

蟲も殺さないやうな顏をしてゐても、それは當にはならない、鬼神のお松だの、夜嵐お絹だの、高橋おでんだの、古來毒婦には美人が多かつた、美人だから人からちやほやされて、つけ上つて毒婦になるのか、毒婦になる位の女だからせめて顏だけは綺麗にしてをけと云ふ、造物主のお情から毒婦が美人なのか、それは分らないが、とにかく、外面如菩薩、內心如夜叉――見た所表面の綺麗なものは中味は醜ない、鬼子母神様が、その內心如夜叉と云ふ奴であつた。

訶梨帝菩薩と鬼子母神とは異名同人である、菩薩とは菩提薩多の略で佛様で、神とは申す迄もなく神様であるが、佛様と神様が何故同じだなぞと異議を申立てはならぬ。

日本の神様も印度へ行けば佛顏して濟してゐる、印度の佛様が日本へ來て神様に成

り濟してゐるのは當然の理窟である、庚神樣の猿田彦たの、大黑天の大國主命だのは、印度の佛樣と日本の神樣を一所にしてこね上げたものだが、訶梨帝菩薩の鬼子母神樣は、日本の日蓮宗の坊樣が、新しく拵へたのである、恐れ入り谷の鬼子母神などといつて、日本も日本、江戸の入谷の占有物のやうに言はれてるが、何の何の、もとを正せば印度產の佛像である。

鬼子母神と云ふから、定めし恐い顏をしてゐるかと思ふと、これは案外、前に御紹介した美人の天女、吉祥天の實の母親だげに頗る美人、昔は鶯泣かしたこともあるつてな梅干婆ぢや無い、膚は白紅色と御經の本にわざ〳〵ことわつてある程、それ程の美人だ、女などは眼中にない佛樣が、形極めて端麗、柳腰にして輕羅も堪え難しとお褒めなすつた位だから、小町も照手姫も及ばなかつたらう、我々凡夫が見たら目がつぶれる程勿體なく思ふかも知れない。

これ程の美人を女房に持つた男は、世界一の果報者であるが、駿馬痴漢を乘せて走ると云ふ日本の俚諺があるけれども、それは本當だ、この美人の訶梨帝菩薩の御亭主となつて納りかへつてゐたのが、德叉迦と云ふ男は、豪くも强くも何ともない男だ。

おまけに夫婦むつましく、千人の子まで生した仲だと云ふのだ、恐れ入谷の鬼子母神とは、これから言ひ始めたのださうだ、まつたく、蓼食ふ蟲も好不好つてね、女の心は分らないものでごわす。

けれどもこの御亭主の德叉迦、きつと尻に敷かれてゐたに違ひない、女房の訶梨帝は子供を生つぱなしで、あつち此方金棒を引いて歩つてゐたに相違ない、だから御亭主どの、留守の間に一生懸命子供の守、千人からの子供ぢや、何といつても骨折だつ

たらう、御苦勞千萬、御察し申上げる次第だが、絶世の美人を妻君としてゐるのだから諦めてゐた。

所がこの訶梨帝夫人、何の因果か子供を食はなければ生きてゐられないと云ふ、途方もない病氣があつたものだ、辨慶が夜な〳〵五條の橋に出て通行人の刀を奪つたやうに、毎日一人づゝ赤ん坊を取つて食ふといふ、大層もない願をかけた、あつちでも赤ん坊がさらわれる、此方でも子供が連れて行かれる、子を持つた親々の恐慌は、日本の大正七年頃の米價暴騰の時どころの騒ぎぢや無い。

そこで、三千世界を通觀し、神通自在だと大法羅を吹きまくりながら、お釋迦樣がやつて來たのを幸ひ、是非どうか一つ、訶梨帝女史を説服して貰いたいと御願ひ申すことになつた。

お釋迦樣も怪しからんことに思召した、女は兒を生み、兒を育てるのが天賦の本性なのに、人の子を取つて食ふとは怪しからぬ、日本といふ國では、明治から大正といふ時代にかけて、新しい女といふものが輩出して、男女同權だの、女子の解放だの、女子の獨立だのと、口廣いことを言つて男の眞似をして貸座敷へ上つたり、年若い男と共同生活をしたり、四人も五人もの男と痴話ぐるつたことがあるが、訶梨帝女史の亂行は、それに輪をかけて進入で引張つてるやうなものだと思召したか如何だか知らぬ、よしそれではおれが取り抑へてやる、大舟に乗つた氣でゐろと、ポンと胸を叩いて、やがて訶梨帝女史の所へ出かけて行つた。

所が、どうして中々一筋縄で行く女ではない、日本の新しい女は、獨身の時は強がりも言つてゐたが、亭主を持つと平凡な世話女房になつて、子供でも生れると、すつ、

かり甘い母親になつて終つたが、印度の訶梨帝女史は、そんな平々凡々な女ではなかつたやうで、さすがのお釈迦様も手古摺つて終つた。

この訶梨帝女史、人の子は情も用捨もなく取つて食うが自分の子は目に入れても痛いとは思はぬ程可愛がる、就中、末兒の愛奴と云ふのを一番可愛がつてゐた、そこを付け込んだお釈迦様が、ある日そつと愛奴を盗み出した、訶梨帝女史の心配は一通りや二通りではなかつた。狂氣のやうになつて探し廻した。

『お前は何を探してゐる』

と、お釈迦様が聞いた。

『可愛い子供がゐません、私の一番可愛い末子の愛奴が何所かへ行きました』

『さうか、お前は子の可愛いといふことを知つてゐるか』

『はい、可愛う御座います、嘗て、さすつて、目の中へ入れたい程です、あの子がゐなければ私は死んで終ひます、私は生きてゐても仕方がありません、可愛い子に別れて此世に生きてる甲斐はありません』

『さうか、それ程可愛いか』

『冗談仰有づちや不可ません、世の中に子供の可愛くない親がありますか、愚圖々々言はないで退いて下さい、私は愛奴を探さなくつちやなりません』

『さうか、お前今、子供の可愛くない親はないと云つたな』

『はい、申しました申しました、可愛いから申しました、どうか、そこを退いて下さい、私は愛奴を探しに行くのです』

『その子のゐる所はおれが知つてゐる』

と、お釈迦様は言つた。

『あゝ、それはどうも有り難う御座います、何所にゐますか教へて下さい』

と、訶梨帝女史は蘇生したやうに喜んだのである、そこでお釈迦様は鉢の下にかくしてをいた愛奴を出して見せた。

『あゝ、愛奴々々』

と、駈けるのを押しはなして、

『まて〳〵、唯はやれない』

『いえ、それは私の子です、私の可愛い子です、私に返して下さい』

『そりや偽だらう、お前は子は可愛くは無いだらう』

『子供の可愛くない親がありますか、ぢらさないで返して下さい』

『本當にお前、子の可愛くない親はないと言つたね』

『えゝ、申しましたとも、可愛いから可愛いと申しました、何かそんな焦らさないで返して下さい』

『いや、返さない、おれは返さないで此の子を殺して終ふが如何だ』

『不可ません〳〵、私の子ですから私に返して下さい、あなたの自由にはさせられません、私の子です』

『さうか、お前の子ならおれが殺しては悪いのか』

『不可ませんとも、大切々々の人の子を殺すなんて餘りです』

『それぢやお前は、何故人の子を取つて食ふのだ』

『えッ？』

とばかり、さすがに訶梨帝女史も二の句が次げなかつた。

そこでお釋迦樣が、例の上手な口で懇篤に訶梨帝女史の不心得を說き喩したので、我慢の角も折れて、今までの惡業を悔改めて、お釋迦樣にお詫をすることになつた。

そればかりぢや無い、これ迄の惡業消滅のため、是迄の罪過を償ふために、世の中の女と云ふ女に無畏を施すべく誓つた、生れ變つたやうな佛樣になつて、子のない女に子供を授け、子供の病氣を癒してやると云ふことを受け合つた、惡にも强ければ善にも强いと云ふのは此の事で、お釋迦樣も大變感心して訶梨帝菩薩の名を與へた、鬼のやうな女が佛樣になつたのである。

餘り折れ方が早いので、さすがお釋迦樣も哀れに思召して、訶梨帝菩薩の食物として柘榴をあてがつてやつた、柘榴が人肉の味がするのは、此の訶梨帝菩薩の時代から

で、つまり子供を食べるかはりに人肉の味のする柘榴を當がつたのであると云ふが、それは眉に唾をつけて訊いてをいた方がよい、お釋迦樣も時々變なことを仰有るから一から十まで本當には出來ない。

さて此の訶梨帝菩薩を何故鬼子母神などゝ云ふかと、元來先にも言つた如く此の佛樣は千人の子供があつて、その內の五百人は天上の鬼となり、あとの五百人は人界の鬼となつた、鬼子の母神と云ふ意味だらうと思ふが、それは日蓮宗の坊さんに訊いて見なければ分らない。

此の千人の鬼も、母の訶梨帝菩薩が、お釋迦樣の御弟子になつた時に、やはりお釋迦樣に降參して佛果を得た、その內で有名なのは、毘舍闍天と、吉祥天女の二人である。

この佛様を信心すると、必ず子が出來ると云ふのは、ざつとこんな因縁話があるからで、お釈迦様も中々うまいことを考へたものである、日本の鬼子母神が恐ろしい御面相をして鬼女然としてゐるのは、あれは間ちがひである、本來鬼子母神は美人である。

三〇、阿難尊者

辨天様や、鬼子母神様や、吉祥天女のやうな美人の佛様もあるが、男の佛様も中々好男子が多い、文珠普賢の兄弟を初め、この阿難尊者の如きも、寺子屋の柳山人のやうに何人娘を焦れ死させたか分らぬと云ふ美男の佛様である。

阿難尊者は、印度麻迦陀國の王族、甘露大王の息子で、お釈迦様の從弟である、男がよくて、貴族の子で、天性の俊才、一をきいて十を悟り、博學多才、記憶力が強かつたと云ふのだから、何と云つても女に好れる男である、その男が、釋迦の教をきいて其の門に入り出家得道したのであるから、世の中の娘さんたちがどんなに失望したか知れない。

佛弟子八萬四千人、その内の高弟で多聞第一と稱された、釋迦の傍に侍すること二十年、その傳教を補翼して最期の終までその傍を離れなかつたと云ふ佛様である、お釋迦様が死んでから後、その説教した所説を編輯して、今日佛教の經文と云ふものが世の中に殘つてゐるのは、實に阿難尊者の博覽强記の力に依るのである。

元來坊さんには美男が多かつた、八百屋お七に放火の大罪をまで犯させた吉三も、やがては和尚となるべき運命を持つてゐた、清姫に戀せられて、蛇にまで變化せしめ

た安珍も美男であつた、阿難は勿論云ふ迄もない。

僞か本當か、そこは分らないけれども、女人の出家して佛弟子となる者は、末代までも阿難尊者を供養しなければならぬと、傳說に言つてある、これ然しながら、阿難尊者が美男だつたからだなどゝ、變な所へ氣を廻しては不可ない、それには一場の因緣話がある。

麻迦陀國王淨飯大王の世子悉達太子、出家得道して、佛敎の大覺者となり故鄕麻迦陀國へ歸つて來て、父王の宮殿で佛の敎を說いた時に、先づ第一に佛弟子になつたのは、その子の羅睺羅尊者であるが、第二が此の阿難尊者である。

所で、悉達太子の后妃、耶輸陀羅姫も、自分の生み奉つた若宮さへも出家し、かつ二世とも頼む夫の悉達太子は釋迦牟尼如來となつて一世の信仰を博してゐるので、自分も、もう此の世に思ひをくことは無いから、女ながらも戒律を授り菩提の道に入らうと思つて、昔は亭主、今は出家の如來樣に御願ひ申したが、御釋迦樣はどうしたものか中々御許容が無い。

お釋迦樣の御弟子で、智惠第一といふ舍利弗、神通第一と云ふ目蓮尊者などが、交々、耶輸陀羅姫の出家得道の許容を願つたが、

「女人をしてわが法門に入らしむるは、佛敎淸淨の道憶久なることは出來ない、譬へば稻の中に莠が交り生じて稻を害するやうなものである』

と、仰有つて、どうしても許してくれない、舍利弗も目蓮も、お釋迦樣の仰有ることが道理千萬だから、一言の返答もない、耶輸陀羅姫に此の事を言つて思ひとまらせやうとしたが、此方の姫も中々强情でどうしても思ひ留まらない、國王の御嫁さんと

も言ふべき姫が、弊衣をきて、徒跣で路上に泣いてゐたと云ふのだから、無茶苦茶な沙汰だ、狂氣の沙汰だ、餘程一生懸命であつたと見える。

それを通りかゝつて聞いたのが、例の阿難尊者である、仔細をきくと、

『それでは私がもう一度御願ひして見ませう』

と言つて、世尊に謁して問うて曰く、

『昔、佛の眷屬に四部衆といふのがあつて、中に比丘尼もゐたさうですが、それは本當ですか』

『それは本當である』

と、お釈迦樣は何んにも知らないから、正直に答へた、何を詰らんことをといふ顔だ。

『それでは何故耶輸陀羅姫の出家得道を御ゆるしなさらないのですか』

と、突込んだ、お釈迦樣、はハ、ア、さては――阿難さすがに味をやるわい、舍利弗や目蓮のやうに正面から耶輸陀羅姫の出家の許を願はないで、動きの取れないやう理詰にして來るわいと思つた。

『女人は佛に感じやすく、亦變じやすいから、それで輕忽に許さないのである』

と云つた、其所で阿難が耶輸陀羅女の道心の堅固なことを説明したので、それでは容してやらうと云ふことになつて、阿難が、戒師となつて姫の飾を落して美くしい尼さんが出來た。

お釈迦樣から妙惠と云ふ名前を頂だいて、姑の憍曇彌夫人から庵室を建て貰つて、そこへ移り住むことになつた、耶輸陀羅姫の召使の侍女五十餘人、ことごとく髪を下

して尼さんになつた、女人の出家して尼になるのは、この耶輸陀羅姫がそも〳〵初めである。

是れ實に阿難尊者の情に依る所だといふので、そこで尼となる者は阿難尊者を供養するやうになつたのである。

三一、金毘羅様

藥師如來の御眷屬に十二神將と云ふのがある、その十二神將の筆頭が、この金毘羅様であると云つたら、金毘羅信心の善男善女は氣を惡くするかも知れないが、正に判然と事實であるから仕方が無い。

金毘羅大將、正しく言へば宮毘羅大將だが、そんなことは如何でもよい、宮毘羅様だなんど〻言つたら語呂が惡くつて强味がない、そんな神様が何所にあるかなんて、世の中の人から見宮毘羅れて終ふ、餘りぞつとした名前ではない、やはり金毘羅様で拜み倒して置く方が御利益が多いやうだ。

日本で有名なのは、四國は讃岐國の象頭山金毘羅大權現である、田宮坊太郎に助太刀して、父源八郎の敵堀口源太左衞門を打たせたので、急に名を賣り出して、そんじよ其所らの善男善女に大變に持てるやうになつた、元來向ふ見ずと綽名をとつた亥神で、太刀を持つて藥師如來を守護すると云ふ役目なのだから、敵討の助太刀には持つて來いである。

宮毘羅といふ梵語は、日本の語に直すと鰐魚といふことであるさうだが、象頭山だの、亥神だのと云ふのは少々聞えない話だ、もつとも俗間に金毘羅様の縁日にはきつ

と雨が降ると言ひ傳えて居るのは、印度の鰐魚が日本へ來て象頭山へ祭りあげられたり、本國印度にあつても、十二支のうちの鼻柱が強い猪なんどに變生させられたので、時々水が戀しくなつて、そこで神通力を起して雨を降らせて水を浴びるのかも知れ無い。

金毘羅樣を船神と云ふのも、そこの邊の關係であらうけれども、その御緣日にはきつと雨が降るかどうか、それは著者も晴雨計でないから分らない。

三二、三寶荒神

大がいの佛樣が、お釋迦樣の理想から生れてゐるけれども、この三寶荒神は、日本で有名な行者、役の小角が夢想で、デッチあげた佛法守護荒神であるさうな。

顔が三つあつて、手が六つあつたと云ふ化物で、役の行者が大和國大峰山で修行してゐると、どろ〳〵と鳴物の相方で姿を現はしたのが、この佛樣である、右の第一の手に獨鈷を持ち、第二の手に蓮華を捧げ、第三の手に寶塔を持つてゐた、左の手は第一が鈴、第二が寶珠、第三に羯磨を持つて出て來て、

『おれは、佛、法、僧の三寶を守護する荒神である』

と、名乘つたさうだから、間違ひではあるまい。

即ち、三の顔の、第一で佛を見、第二で法を守り、第三で僧を護る、そこで顔も念入りに三つ拵へたものであらう、顔が三つあれば、手は自然六本なければならない譯だ。

此の役の小角と云ふ行者は、この外にも藏王權現などの製造發賣の元祖で、第三十

五代舒明天皇の六年甲午の正月元旦に生れた、面貌異相にして形躰魁悟にして赤子と異なると、舊記に書いてある位だから、餘程變な顏だつたに違ない、どうも一月一日に生れる男は、變面異相が多いやうだ、秀吉も一月一日に生れて然して變面異相だつた。

大和國葛城郡茅原郷の人役公氏の子、その妻、天より一つの獨股杵が降つて口中に入ると夢見て妊娠したのであると云ふ、學ばざるに密乘を感悟し孔雀明王の不動の眞言を持誦した、雨中に笠を被らずして衣服を濡さず、足駄を履いて歩いて蟲を踏ますに藤を編んで衣とし果實を食として佛道を修行した、河内國金剛山、攝津國箕面山等に苦行してゐるうちに、佛勅を受けて、心の限り力の限り全國の難山を切開いて佛場となすべく心を誓つた、それから大和の大峯、吉野の金峯山、富士、筑波、愛宕、彥山白山、立山、羽黑山など、日本の難山高山に佛場のあるのは、すべてこの役の小角が開いたのであると云ふ。

意に叶はぬ時は、山神を縛りあげて、一言主の谷の奇跡をつくり、地藏菩薩を祈り出したが、氣に入らないので伯耆の大山へ投げ飛ばして、吉野の投地藏のあとを殘したり、後、母を鐵鉢に乘せて支那へ行つて終つた、その時が文武天皇の大寶元年で行者の年は六十八才であつたそうなが、それつきり終る所を知らないと云ふ、當時の人は神變大菩薩と尊稱してゐた。

此の行者は空中に座し、雲を踏んで國々を往來し、若し人の捕へんとし、若しくは刄を加へることがあれば、その刄は二つに折れて用を成さなかつた、人の吉凶禍福を未前に察し、病なる者には呪符を與へて如何なる奇病難病も全治せずと云ふことなし

依つて以て神變大菩薩といふ、今の世の中の、天理教や、黒住教などが、御符だの御水だのを病人に呑せるのは、役の行者のやつたのを眞似をしたのであるが、その精神は及びも付かない。

話が、他へ外れたが、荒神様は此の役の行者が拵らへたのである、常に修行者を助け、不信放逸のものを罰する荒神様が、何故、人の家の勝手元へ、祭られるか、その理由はよく分らない。分らない譯だ、現に荒神様をこしらへた役の小角その人だつて、何所で如何死んだか分らないんだから。

三三、金伽羅と制吒迦

童子と云ふと、可愛げな顔をしてゐると思ふと大まちがひ、不動明王といふ恐ろしい荒佛の家來だけに、金伽羅童子も制吒迦童子も、餘り可愛くない顔をしてゐる、不動様の左にゐるのが金伽羅童子で右にゐるのが制吒迦童子である。

役の行者が攝津の箕面瀧に籠つて荒行をしてゐた時に、不動様の命令で毎日御用聞に來たと云ふ、酒屋の小僧のやうに、よく佛教の行者が御籠をすると、ちよい〳〵飛び出して來て御用聞をするのが、この二人の童子である、文覺が那智の瀧に荒行をした時、桂川力藏が成田の不動様に三七二十一日の斷食の行をした時、さう云ふときに何時飛んで來て御利益を授けてくれる、有り難い童子である。

歌舞伎座と云ふ、日本の大劇場の、大正七年の十月狂言に『隨市川鳴神曾我』と云ふ一幕がある、曾我の一滿と箱王丸の兄弟が、父の敵の工藤祐經を討つべく力を添へ玉へと、三七日の祈願を、箱根の鳴神不動に籠めると、滿願の日に、例のごとく大ど

ろ〳〵の相方になつて、大薩摩の連中で、

『それ大空に一つの明星あり、大威力にして大悲徳徇ふが故に、青黒の形を現じ大定の金剛石に座し給ふ、背に大智慧の火焔を負ひ、右に降魔の劔を持ち、左に羅刹の縛めの繩、御前立の金伽羅制吒迦の兩童子は、禮拜の衆生を助くる御誓ひ、尊くもまた有り難き……』

で、音樂の鳴物になつて、編子張りの中へ眞中の岩經へ不動明王、上手下手に金迦羅制吒迦の兩童子、畫面の見得で現はれると、又しても大どろ〳〵をかぶせた鳴物……

とゞ、不動樣と兩童子の科白で、

不『即心加持の慈救の呪も、わが中央に座すときは』

金『東方に座す降三世夜叉明王のお前に對し』

制『西方に座す大威德夜叉明王の控ゆれば』

金『南方軍荼利夜叉明王』

制『北方金剛夜叉明王』

不『われは金迦羅制吒迦の兩童子あり、衆生を守る』

金『惡魔降伏なさんこと』

制『誓つて疑ひ』

兩『あるべからず』

と、科白のとりやりがある、この金迦羅制吒迦の兩童子は、可愛いゝ子供につくつてあるが、本當はまづい顏だ、でも、御利益に別はないから構はない、そこで科白が續く。

不『如何に兩童あれを見よ、信心あつき二人の童、三萬四萬はおろか、十萬越せし信者のうち、彼に越えたる行者あらんや』

制『されば、爺樣の年寄より、若き男女の信心も、大方知れた願ひごと』

金『然るに彼は健氣にも、親の敵に出合ひしとき、非力ありせば肝腎の、勝負にまかろしや詮なき仕仕ひ、武門の恥と今度の願望』

不『かういふ者に力を授けて遣はさねば、大慈悲力とは言ひ難し』

金『三七日の滿願に、彼の强氣を見る上は』

制『蘇生いたさせ願望の、成就を告げて得さすべし』

不『はて賴もしき』

二人『若者ぢやなあ』

と、宣ふ聲も雲がくれ姿は消えて失にけり……で、どろ〳〵と姿を消す……靈夢の吉に眼を見ひらいて、一滿と箱王が、喜び勇んで力石に手をかけると、靈驗空しからず安々と持ち上がる、急に力が出たと云ふのだから、不動樣や金迦羅制吒迦兩童子の御利益は大したものだ。

敵討といふと、きつと引ぱり出されて、この兩童子も忙しないこと夥多しい、中々二人つきりぢや廻り切れまいが、明治維新以來、私の敵討は御法度なので、力瘤の入れ所がなくつて困つてゐるだらう、芝居や活動寫眞に賴まれる位ぢや、物價騰貴の今日、鼻の下が乾あがつて終ふと、言つてるか如何だか。

三四、月蓋長者

大倉喜八郎でさへも男爵になつた、山下龜三郎が勳三等に叙せられた、内田信也が百萬圓を教育費として文部省に寄附した、何れ、金にかはる何物かを得やうとする心算だらう。

三井、岩崎、藤田、鴻池、住友、澁澤なんど云ふ連中が華族になつたのも、何れ結局、せんじ詰めれば、その金が物を言つたのである、誰だつて、唯で金を出すのは嬉しくは無い、その昔、印度の月蓋長者だつて、やはり御多分には洩れなかつたのである、佛様顔して澄してゐるのは、ちと虫がよいと云ふものだ。

但し、お釈迦様に言はせると、一切の衆生みな佛性があるのだから、人間で、しかも金持で、慈善心のあるこの長者が佛様でないとは申されない、印度國、毘舍離城下の大金持で、ある歳國内に悪病の流行した時に、お釈迦様の命令を受けて、彌陀三尊の像を鑄て悪病退散の祈禱をしたらば、果してその通り悪病が絶えた。

百萬圓献金しても漸やく勳三等である、男爵になるのは中々容易なことではない、大倉なんぞ、十年も心がけてゐて漸やく華族になつたのに、月蓋長者は、佛教の像を拵らへた位で、後世末世から佛様同格の取扱をうけて、大にその徳を稱せられてゐるのは、ちと儲けがボロ過ぎる、今の言葉で言つたら佛成金とでも云ふのかも知れない、さりとは運のいゝ男で御座るわい。

もつとも、今の成金どもは、勳等爵位が欲しい、名譽がほしい、人から褒められたいと云ふ、卑しい根性から寄附も献金もするのだが、昔の印度の長者は、シンから心から佛を供養したので、そこに一點の慾心は無かつたのだから、強ち運がいゝとばかりも言へない、お釈迦様の説法めくが、人間の運不運は元來心がけの善悪によるの

だから、心がけのいゝ月蓋長者が後世までゐらがられるのも無理はない、今の成金連の名前が、後世の人心にどれだけ印象されてゐるか如何かは疑問である。

何にせよ、ない袖は振れない、ある金を撒くのだから、たとへば男爵になりたいために、献金をしたつて、新聞に書かれたいために寄附をしたつて、それは決して悪いことでは無い、安田や久原のやうにいつくら金がうなつてゐたからつて、使はない、若しくは無益に費やす金は何にもならない、有り難くはない、名誉のためでも何でも献金したり寄附したりする成金の方が餘程國家を益してゐる譯である。

三五、須達長者

太平記や、源平盛衰記でお馴染の祇園精舎は、この須達長者が拵らへたもので、お

かげで日本人に大に諸行無常の聲を吹き込んだ。

須達は、舍衛國の大富豪で、波斯匿王の大臣であつた、夫妻共天性慈悲深く、孤獨貧窮の者を恤み財寶を散して善事を爲すを樂しみとしてゐたと云ふから、日本の金持から見ると、ちよつと毛色が變つてゐた。

舍衛國と云ふ國は、その頃まだお釋迦様の敎が傳はつてゐなかつた、ある日、須達長者は、王舍城の月蓋長者の所へ用事があつて行つた、それは月蓋の娘と、須達の息子と縁組の相談である、話が長引いたのでとう〳〵其の晩泊り込んだ、夜中に目を覺して見ると召使たちが大騒ぎをして御馳走の用意をしてゐる、それが一人や二人の準備ではなく、數千數百人の食器を取扱つてゐる、翌朝になつて訊いて見ると、月蓋が笑つて、

『今日はお釈迦様がその御弟子をつれて御出でになるので、その供養の用意をしてゐたのです』

『お釈迦様とは誰方ですか』

『お釈迦様を御存知ないのですか、それは驚きましたな』

と、そこで月蓋が、お釈迦様の生立から何から詳しく話して聞かせたので、

『さういふえらい方なら、私も、もう一晩逗留してお話をきかせて貰ひませう』

『それは御殊勝なことで、私からお勸めしやうと思つてゐた所です』

その晩お釈迦様が、十大弟子をはじめ、千人あまりの佛弟子を連れて月蓋長者の家へやつて來た、そこで須達も親しく説教を聽き、お釈迦様にお目にかゝると、すつかり感心して終つた、　序でに舍衞國へも佛教を弘通て頂きたいと御願ひいたした。

『よろしい、それでは説教をする精舍を拵へなさい、何時でも行かう』

と、仰有つたので、須達は喜び勇んで舍衞國へ歸つた、お寺を建てる土地を選ぶために、十大弟子の一人舍利弗尊者が須達と同道して舍衞國へ行つた。

そこで、須達は舍利弗と一所に舍衞國を巡回したが中々氣に入つた土地がない、あるにはあつたが、それは波斯匿王の皇太子祇陀太子の所有で、買ふことも讓りうけることも出來ない、然し、如何かして祇陀太子を説きつけやうと思つて、須達が一人で宮中へ伺候して祇陀太子に謁見を願つた、四方八方の話の末にお釈迦様の法德を稱讃して、

『此國にもお寺を建て、佛教を聽かせたら惡を捨て善を修め、國家安寧の基となるで御座いませう』

と言つた、祇陀太子もそれは同感である、何しろ後には須達と共に佛教守護の大檀那となつた位の人だから、須達に言はれなくも、お釈迦様のことは先刻御存じであつた。

『おれも父の國王に御願ひしてお釈迦様を御招待しやうと思つてる』

『然し、お寺がなければ駄目です』

『何、譯はない、何所か國内の空地を卜して精舍を建てればよい』

『不可ません、唯空地があつてもそれが佛の意に叶はなければ駄目です、それにはよい所があります』

『それは何所だ』

『殿下御所持の莊園です、其所がよいと云ふのです、私に拂下げて下さい』

『それは不可、あれはおれの遊園地であつて、他人には譲れない』

『でも御座いませうが、遊樂は一時です、一個人の樂しみです、あれをお寺にして佛説を聞かせれば、萬代萬民の幸福になります、殿下の遊樂地は何所にでもあります、どうか譲つて戴きたい』

と、今で言つたら御料地の拂下運動だ、大正の日本では拂ひ下運動など云ふと、こそ〳〵裏口から入りこんで、奥様や何かに袖の下を賄つて、おまけに安く拂ひ下げて高く賣らうと云ふ怪しからぬ者が多いが、須達大臣のは、憚りながら、そんな後暗いのではない、眞正面から理攻めにして行くのだ。

太子も困つて終つた、そこで一計をめぐらした、迚も相談にならない値を吹つかけたら須達も思ひとまるだらうと思つたので、

『ではお前に賣らう、然し、その代價はちと高いぞ』

『どんなに高くつても宜しう御座います』

『あの莊園に黃金を敷いて、一寸の餘地も無いやうにしろ、然らばその黃金と引き換に賣つてやらう』

『よろしう御座います、では早速金を布かせます』

と言つて須達はかへつた。

太子も驚いて終つた、今更僞だとは言へないので、如何したらいゝかと思つて心配してゐると、もう須達が黃金を象に積んでその莊園へやつて來た、太子も出て見ると又しても驚かされた、五頭の大象に何億と云ふ金を載せて引いて來た、人足を指揮してそれを莊園に敷かせると、少々足りない、それで更に二頭の象に金を負はせて來ると、さすがに廣い莊園も、とう〳〵一寸の餘地もないやうに黃金を敷きつめた。

太子は驚いたが、然し見ると莊園には樹木が麗々と茂つてゐる、これは約束の外だから、文句をつけて賣り渡すまいと思つてゐたが、今須達が、八十頃もある莊園に黃金を敷きつめたのを見ると、さすがに感心して終つた、これ程の大金を投げ打つて釋迦のために寺を拵へやうとする須達の信心はゑらいものだ、よし〳〵自分も、いつそのことに此の莊園の樹木をみんな寄附して、須達の志を助けてやらうと思つた。

お經の文句を見ると、十二浮圖、七十二講堂、三千六百の坊舍、五百の樓閣があつたと云ふのだから、如何に廣かつたかゞ分る、その廣い莊園に金貨を敷きつめたと云ふのだ、今の日本の成金などには迚も足許へも寄り付けやしない、一人前一萬圓の費用の宴會を開いたの、廿臺の自働車で箱根へ行つたの、朝鮮で虎狩をしたのつて言つ

ても、須達長者の豪勢もない成金ぶりには及びもつかないではないか。

そんな卑劣くさい、百萬圓やそこ〳〵の金を寄附したり、一千萬や二千萬の金を儲けたつて、成金だの、成功だの、帝王の奢豪だのつて騒ぎ廻つて、世間でも噂をすれば、新聞でも書き立てる、日本といふ小さな國の、ケチ臭い人間の有樣を、あの世にござる須達大臣、定めし苦笑してゐられることでがな。

どうです、そんぢよ其所らの成金先生、ちと須達長者の爪の垢でも煎じて飲んだら、成金呼りもちやんちやら可笑しいと言ひたく成る。

閑話休題とする、須達長者が土地を寄附する、祇陀太子が材木を寄進する、月蓋長者が大工人足を寄進して、そこで出來上つたのが、有名な祇園精舍である、諸行無常の鐘の響が、全世界に聞え渡つたのも故あるかなである。

日本でも、此の位氣前のいゝ成金が一人位出來さうなものだと、著者はしみ〴〵思ふ、祇園精舍の建築に就ては、舍利弗が大に神通力を現はして奇術をつかつたと云ふ傳說などもあるが、眞僞の程は解し難い、それ程の廣大な祇園精舍も、今はそのあとも留めてないけれども、須達長者の名は佛敎のあらん限り消えまい、日本の山下だの山本だの成金連や、三井岩崎の徒が、どれだけの尊敬を以て後世民人の記憶に殘るだらう、覺束ないものだ、南無阿彌陀佛々々々々々々。

三六、彌勒菩薩

東京の本所に彌勒寺があつて、彌勒寺橋など云ふ橋までが出來てゐる、昔は本所村といつて、江戸の部類へは入れられなかつた、こんな場末のちつぽけなお寺の本尊樣

だから、詰らない佛様かしらと思ふと、どうして〳〵、つい川向ふの觀音様なんぞよりは、餘程ゑらい佛様で在しますのだ。

赤穗の四十七士が、大石内藏之助を頭首と仰いで、吉良の邸へ切り込んだ時に、もし萬一やり損つて上野介の白髮首が獲れなかつたらば、その時には二番手があつて、大野九郎兵衞だの奥野將監だのが再擧を企てることに手筈がきまつてゐたと云ふが、萬事に拔け目のないお釋迦様も、ちやんと後嗣をこしらへて置いて、八十年の人命を終つた。

その後嗣と云ふのが、この彌勒菩薩といふ佛様である、だから中々大したものだ、場末の本所になんぞ祭りこんでをくのは勿體無い位だ、もつとも釋迦の死後、五十六億七千萬年の後に此の世に出現すると云ふから、隨分と氣の長い話で、當にはならぬけれども、ともかくもお釋迦様がちやんと弟子たちに約束をして置いたのである。

何故五十六億七千萬年なぞと云ふ氣の長いことを言つたかと云ふと、そも〳〵五十六億七千萬年經つと、お釋迦様の傳へた佛敎のあとが此世に絶えてしまふ、その時に猛然として此の佛様が此の世に現はれて、佛の敎を說くのであるさうな、元來お釋迦様が、五十六億七千萬年前に此世に現はれた毘婆斯佛の後嗣なのである、毘婆斯佛の說いた敎が五十六億七千萬年の後の、丁度お釋迦様が生れた頃に段々影が薄くなつたので、猛然として悉達太子が發心成道して佛法を弘めたのである。

歷史は繰りかへすと云ふから、折角お釋迦様の弘めた佛法も、五十六億七千萬年の後には跡を絶つて終ふから、そこで轉ばぬ先の杖で、後嗣をこしらへてをいて安心して涅樂に入つた、見立てられた彌勒菩薩は有り難い幸福で、氣長く五十六億七千萬年

の後を俟つてゐるのだが、待ち遠しいことであらう、待つ身の辛さ、一分一時の短かいときでさへも、一年二年のやうに長く思はれるのに、五十六億七千萬年の長い年月を待つてゐるとは、さて〳〵御苦勞千萬、芝居の初日に幕間を待つより餘程辛かろ。

惚れて通へば千里も一里といふから、お釈迦様に頼まれて、よし來たと引きうけて見れば、それも自分から求めてする苦勞、長いやうでも案外短かいかも知れぬ、だがお彌勒さん、こんなけち臭い、せゝこましい、やゝこしい、憂世へなんか出て來ない方がようござんすと、著者がお釈迦様なら却つて御留め申す、もつとも、そのせゝこましい、ケチ臭い所を濟度するべく出現するのだと仰有れば今更何にも言ふ所は無いが……。

さてその彌勒大士どの、當にもならぬ五十六億七千萬年の後を俟つて、唯今では六欲天のうち第四重天、兜卒天の王様である、この國の人は誰の顔もみんな歡喜に輝やいてゐる、嬉しげに樂しげに浮かれてゐる、それもその筈、火水風の災害がない、火に燒けず、水に流れず、風に吹かれず、おまけに不老々死だ、こんな結構な世界を捨てゝ、此の世へ苦勞を求めにお出になるとは、彌勒さんも餘程物ずきだ。

佛様はみんな物好きである、お釈迦様だつて、一天萬乘の王位を棄て、美人の妻君をうつちやらかし、可愛い子に別れ、好きこのんでの難行苦行、眞黑になつて、汗水流して、食ふや食はずにゐたのだから、物好でないとは言へ無い、月蓋だつて須達だつて、阿難迦難も、誰も彼もみんな好奇者だからこそ、人から惡く言はれながら佛教を信じ何千億と金を投げ出したのである。

阿難の好奇者、ある長者の娘の、しかも美人に戀せられて、

『妾は阿難の目を愛す、耳を愛す、鼻を愛す、口を、手を、足を愛す、身を愛す、全體を愛す、これ妾の阿難を戀する所以なり』

などと、素敵猛烈に戀せられて、それでも尙逃を張つて娘を失戀に泣かせたと云ふ變り者だ、今の坊主なら、ちつと位片輪でも、これ程猛烈に戀せられて、おまけに金持の娘だ、忽ち還俗して聟になつて終ふ、然るに阿難は振つて振つて振り飛ばしたから豪い。

話は横道へ入つた、さて彌勒菩薩、不老不死、火水風の災害のない、歡喜に滿ちた結構な世界の王様でありながら、不心得にも、苦娑婆の此の世へ出る時を俟つてゐるのだが、五十六億七千萬年といふと、大分後のこと、近世科學の智識によつて研究すると、その時代にはもう地球といふものが、全たく作用を失つて、月のやうに冷却して人間が住めなくなる、いえさ、人間などゝ云ふものは世界に後を絶つてしまふかも知れないのに、お釋迦様の方便も、斯うなると法螺が全然見えすいて來る。

然し、人類も何にもゐない世界のことだから、少し位僞を言つても知れはしないと云ふ考へから、さてこそこんな出駄羅目をデッチあげたのか、さりとは人を馬鹿にしたものだ。

彌勒、本性は阿逸多凡である、或は無能勝とも言ふさうだ、お釋迦様より四十二却の昔、華林園の龍華樹で、善思佛から敎を受けて天へ上つたので、まだ〳〵おれの出る番ではない、眞打はあとから出る、釋迦だの、阿彌陀だのはあれは前座でさあ——と長い顔を撫でゝ納りかへつて居る、鬼が出るか蛇が出るか、あけて口惜しき玉手箱白い煙がすうつと立上る位が、落かも知らぬ。

千番に一番のかねあひ、首尾よく現はれましたらば御手拍子御喝采、やり損ひはいく重にも御用捨――と、お釈迦様の口上を其儘御取次申す。

三七、四天王

東西南北の四天を守つて、佛法を保護するので四天王といふのである、東方持國天王、西方廣目天王、南方増長天王、北方多聞天王の四人である、欲界第六天の第一階の四方を領して、正法諸佛を守護してゐる、五大明王に次ぐ勇士である。

日本で武家の四天王と云ふのも、是から出たのである、德川の四天王が、井伊、本多、酒井、榊原の四人であることは、講釈師の口で御馴染である、ずつと昔では源頼光の四天王が、渡邊綱、坂田金時、古部季武、碓氷貞光の四人、大江山の鬼退治以來子供も御承知の顔振である、義經の四天王が龜井片岡伊勢駿河の四人、芝居で御日にかゝる顔であるから娘も御存じさまだ。

近頃では桂公の四天王が大浦兼武、後藤新平、若槻禮次郎、仲小路廉であつたが、桂が死んでから、敵味方に別れてしまつた、昔の四天王はそんなことは無い、最後まで主君を守護し主君と死生を共にしたが、變れば變る世の中、こんなものは四天王などゝ云ふのは言語同斷である、四天王とは主君を保護する重大な役目である、一朝の利害關係から敵味方になるなんて、そんな浮薄なことぢや仕方がない。

星亨の四天王が、菅原傳、渡邊勘十郎、日向輝武、横田千之助であるか、渡邊も日向も死んで、菅原は老衰して昔日の元氣はない、横田が一人で法制局長官で世に時めいてゐる、平民内閣の元祖、政黨内閣の本家、總理大臣原敬の四天王が、高橋光威

廣岡宇一郎、武藤金吉、兒玉亮太郎だ、四天王も段々下落して來た。

尾崎紅葉門下の四天王が、泉鏡花、德田秋聲、小栗風葉、柳川春葉の四人、紅葉が死んで、文壇の大勢が變化してからは、お互に昔日の交情はあるまい、春葉も死んで終つて、あとの三人の間も、お互の文壇に於ける立場が變つて行くやうに、心も變化して行くであらう。

それはさてをき、佛法守護の四天王も、印度にゐるときは兄弟同様に仲がよかつたが、日本へ渡つてからは、いづれもちり〳〵ばら〳〵、何所で何をしてゐるやら分らないが、その内で一番人氣のあるのが、北方守護の多聞天王である、多聞天王といつたのでは分るまいが、毘沙門様といへば知らぬものはない。

鬼子母神様の總領息子で、吉祥天女の兄さんだから、定めて好男子だらうと思ふと左様でも無い、甲冑に身を固めて、青鬼赤鬼を兩足で踏みにぢり、刀を突き立て威張つてゐる鬚男である、この佛様が、何故七福神の仲間に入つてゐるかと云ふと、印度では財寶の神様で、須彌の第四天、北水精宮にゐて黄金の庫を守つてゐるからである印度では三頭三腕の化ものだが、海を渡つて日本へ來るうちに、立派な武者姿に變化してゐる、何さま、郷に入つては郷に從へ、どうでも姿が變へられるのだから重寶である。

日本の忠臣を一人で背負つて立つてゐる楠正成公は、この毘沙門様の再生だといふが、それは湊川へ行つて『嗚呼忠臣楠子之墓』を堀くりかへして、地下の楠氏を蘇生させて伺を立てなければ分らない。

簡單に四天王の役目をいふと、東方持國天王は、名詮自稱、國を保護する、西方の

廣目天王は、大きな目玉で惡鬼羅刹を見張つてる、南方の增長天王に、惡魔や餓鬼を支配して、自他の威德を增長せしめる、さてまた北方多聞天王は夜叉や羅刹を支配して、かねて金庫の番人をしてゐるので、何れも帝釋天の外樣大名といつた格式でありさうな。

三八、北斗菩薩と妙見樣

日も月も、佛敎守護に祭り込む慾の深いお釋迦樣が、あの空の星を見逃しては置かない、案の定、北斗菩薩といふのが、所謂北斗七星である。

この北斗七星が、印度の空に赫々として輝やいて、曉天に靜かな光明を放つてゐるのを見て、お釋迦樣が、絕對の眞理を發見して、そこで佛敎といふものゝ根本が暗示されたと云ふ譯であるから、釋迦妙見の星であるといふところから、妙見菩薩とも云ふのである。

因由をきいて見ると、佛樣も餘り有り難味の薄いのがある、柳島の妙見樣が、藝人仲間に人氣のあるのは、どういふ理由だかそれは分らない、由因を聞けば、どうせ有り難味が薄くなるだらふ。

三九、十大弟子

一から十までの數は、何萬何千と云ふ數の基となるもので、單に數の上から言つても中々大切なものである。

日本では、加藤家十虎の勇士、芭蕉翁門下の十哲、支那では孔子門下の十哲、何れ

も、その主人を補佐し、若しくは師匠を助けて、家を守り道を傳ふるのに大變な力があつたのである、十傑だの、十勇士だの、十秀才だの、その他にも澤山ある、一から十は數字の基本である如くこれらの十勇士や、十哲は、その道、その國にとつては、その興隆の主力となつたのである。

さて此の十哲だの、十傑だのといふのは、何所から言ひ出したと申すと、やつぱりお釈迦樣が本家本元、製造發賣元である、お釈迦樣の豪さ加減の底は分ら無い、ほと〳〵感服仕る次第である、お釈迦樣より少し遲れて基督教を弘めた、ユダヤのイエスは、もそつと慾が深かつたと見えて十二の高弟を拵へた。

賴光の一人武者、明智の三羽烏、德川の御三家、何々の三幅對、賴光義經の四天王秀吉の五奉行七本槍、寶船の七福神――それからこの十傑、十哲、こういふ豪い人々を引くるめて褒る言葉は、大がいお釈迦樣が發明したのを、後人が眞似たのである、そんなに類似しい粗製品が出るならば、特許權を貰つてをけばよかつたと、お釈迦樣は思つて御座るかも知れない。

僞だと思つたら、ちよつとお經の本を讀んで見玉へ、二王がある、佛寶、法寶、僧寶の三寶がある、持國、廣目、增長、多聞の四天王がある、五大尊五大明王がある、五大力菩薩、五智如來といふのもある、北斗七星の菩薩、過去の七佛、それから此の十大弟子がある、十二神將などいふのもある、十六羅漢もある、日本や支那で、三傑だの、四天王だの、七福神、十哲など云ふのは、みんな此のお釈迦樣の言つたことを眞似たのであると、ちよつと御斷りして置く、但しお釈迦樣に賴まれたのでは決して無い。

何、いくらか貰つて頼まれたのだらうつて、冗談ぢや無い、そんな阿堵物のために筆を左右する、明治大正時代の新聞記者とはちつと育が異ふんです――とは表むき、本當はお釈迦様を煽てをけば、それ地獄へ行く所も極楽へ廻して貰へる……。

そこで、閑話休題、

お釈迦様もゐらい、十大弟子を選んだが、誰が一番で、誰が十番だと言へば、一番は悦に入るが、びりつこけになつた者は嬉しくはない、依つて、誰でも皆人に秀れてゐることにして終つた。

十人のお弟子のうち、摩訶迦葉は上行第一と云ふ折紙付である、十大弟子の隨一である、拈華を見て直ちに釈尊の教を感得し微笑の一話、遂に禪宗第二傳の稱を得た今、鎌倉あたりに出店を出してゐる禪宗の拈華微笑の公案といふのはこの話であるさうな。

舍利弗尊者は智慧第一といふ折紙付、阿難尊者は多聞第一、美男第一、おつと美男だけは除計です、解空第一の須菩薩、説法第一の富樓那尊者、昔から雄辯を富樓那の辯を振ふといふ位、それ程の雄辯家であつた、西洋ではデモスゼネス、支那では蘇秦張儀などいふ雄辯家も、みんなこの富樓那の眞似をするのである。

この富樓那尊者、初めは商賣人だつたさうだが、一朝お釈迦様の説法を聞いて、頭を丸めて坊さんになつた、その商賣人の口前で御説教をしたから、善男善女がころころ參つて終つた、元來坊さんといふものは、お喋りが多いのに、その喋舌やの多い坊さんの中で辯口第一と稱せられるのだから、餘程口前が上手だつたに相違ない。

神通第一といふ折紙をつけられた目蓮尊者は、舍利弗の友人で舍利弗と共に釈迦に

歸依したが、その母、目蓮の神通第一なのに慢心したものか、死んで後に餓鬼道へ落ちて苦しんでゐたので、目蓮が歎き悲んで、お釈迦様に御願ひして、大施餓鬼を行つてその靈を祭つた、今、毎年七月、宇蘭盆に魂祭をして佛を供養するのは、目蓮の施餓鬼から始まつたのである。

尙、この目蓮は、釋尊とは生れながらの敵同士であつて提婆達多を改心せしめたと云ふ人である。

論議第一の稱ある摩訶迦旃延尊者も、頗る説法がうまかつた、この人は富樓那とは全たく別方面で、皮肉を言つたり、缺點を探して突込むことが上手であつた、演舌家といふよりは討論家問答家だ、天眼第一が阿那律、惡事災難を未前に察し、千里二千里先のことを手にとる如く見ると云ふ人である、持戒第一は優婆離尊者、これはお釈迦様が、迦毘羅國の宮殿にゐた頃からの家臣で、日本でいへば東宮御學友といふ格の人、阿難や羅睺羅と共に佛様に歸依した、持戒第一と云ふのだから、品行方正の佛様である。

第十がお釈迦様の實子、羅睺羅尊者、密行第一と云ふ定評がある、親の光は七光りお釈迦様のおかげで十大弟子の末席を汚してゐるのだと思ふと大間異ひ、本當にエライ所があつたのだ、日本の大名や華族の馬鹿殿様、馬鹿旦那とはちと性質が異ふ。

傳説に依ると、母耶輸陀羅姫の胎内に、お父さんのお釈迦様と同じやうに三年もゐたので、お釈迦様の子ではない、隱し男の子だと云ふので、母もろともにわびしい生活をして疑の解ける日を俟つてゐた、夢の間に十餘年の月日が經つて、父の悉達太子は釋迦如來となつて摩迦陀國迦毘羅城へやつて來たのである。

夕陽山青瑠殿へ入つて、佛の敎を說くべく法座についたが、何れも同じやうな眞黑々の羅漢樣なので、誰がお釋迦樣やら少しも分らない、父の淨飯大王も、育ての母の憍曇彌皇后も、大臣も、百官も、お釋迦樣のもとの御愛妾の鹿野、瞿陀彌の兩女さへも、お釋迦樣の顏が分らないので、誰を拜んでいゝのか分らない、みんな呆れ返つて物言ふ者も無かつた。

それも左樣だ、お釋迦樣は迦葉や舍利弗、目蓮、富樓那などの弟子數十人を連れて、その中に交つてゐるが、みんな同じやうに頭を丸めて、藤の太布を黑で染めた衣を着木葉を絲で編んだ袈裟をかけてゐるから、誰が誰やらわけが付かない。

そこで遙かに末座にゐて此の體を見てゐた耶輸陀羅姫は、わが子の羅候羅の耳に口をよせて、

『此の年月、雨につけ風につけ戀ひ慕つてゐた父樣は、あの坊さんたちの中にゐるがお前は誰でも構はないから、お父樣と思ふ方に此の片袖を渡してお出でなさい』

と、別れの際に貰つて置いた遺念の片袖を渡した。

羅候羅は此の時十一歲であつたが、母から片袖を貰つて、多くの人をかきわけて、恐れ氣もなくつか〳〵と前へ進んだ。

『これ〳〵、お前は誰だ』

と、大王の家臣が留めたが、羅候羅は恐るゝ色もなく、袖うち拂つて靜かに步みよつて、第三番目の法座にゐた坊さんの前に座つて、その片袖を捧げた。

何者の子なれば、此の小僧は、この嚴重な御殿の、嚴めしげな顏をしてゐる大臣や武士のゐる中を恐るゝ色もなく出て來たのであらうと、王も、皇后も、大臣も、坊さ

んたちも思つてゐると、第三の座にゐた坊さんは、手を伸してその片袖をとり莞爾と笑つて、

『不變眞如、妙覺無爲、衆生智願皆圓滿』

と、經文を唱へると、御身より光明を放ち、三十二相八十種好、光明無碍、大覺知現の法身となつた、敷百人の弟子達も座を退つて、

『本地本佛釋迦牟尼如來』

と唱へたので、さては此の人がお釋迦樣かと、大王はじめ百官有司、首をたれて禮拜した、耶輸陀羅姫も我知らず前へ出て禮拜し、羅侯羅を抱えて泣いた。

さても、此の不可思議な奇特を目前に見せた、此の幼兒は何者の子であるかと、人々が不審の眼を睜つてゐると、お釋迦樣は、此の子が自分の本當の子であること、耶輸陀羅姫は隱し男を持つやうな女ではないこと、いろ〳〵に父の淨飯王、母の橋彌夫人にお話があつて、遺念の片袖を取つて御經を唱へると、不思議にも二十五言の文字が織り出したやうに現はれた。

『我去後三年過、可レ得二善男子一、即是我因位、爲二正汝生來大善知識一』

と、書いてあつた。

淨飯王も、憍曇彌夫人も、疑念初めて氷解して後悔慚愧にたえない、貞操無類の耶輸陀羅姫に淺はかな濡衣を着せたことを今更の如く後悔した。

そこで羅侯羅はその日から剃髪して出家得道し、十大弟子の內智惠第一と呼ばれた佛で文珠、僧で舍利弗といふ程の舍利弗尊者を文書筆道の師として附けられたのである、

その羅睺羅が、やはり十大弟子の一人となつて、密行第一といふ立派な折紙を、お父さんのお釋迦樣から貰つたのは、爪の蔓に茄子はならず、橘に蜜柑はならぬ、世の譬の通り、此の親にして此の子なり、えらい佛樣になつた。

さて、十大弟子と云ふと、以上に説明した佛樣のことで、即ち、

上行第一の迦葉、
智恵第一の舍利弗、
多聞第一の阿難、
解空第一の須菩提、
説法第一の富樓那、
神通第一の目蓮、
論議第一の迦旃延、
天眼第一の阿那律、
持戒第一の優婆離、
密行第一の羅睺羅、

の十人、この十人がそれ〴〵自分の得意の才能を發揮して、佛法を弘められたので、所謂創業の功臣である。

四〇、摩耶夫人

一人出家すれば、九族天に生ると云ふから、ましてや自分の最愛の子が、釋迦牟尼如來世尊と仰がれるやうな佛樣になつたのだ、摩耶夫人が天に上つて再生して、帝釋

天の后妃に備はつたと云ふ傳説が生じたのも故あるかなである。

摩耶夫人は、摩迦陀國王淨飯大王の皇后である、姉の憍曇彌夫人と共に淨飯國王の寵愛を受けてゐたが、ある夜天上の佛菩薩が胎内に宿ると、夢見て、翌日から懐胎した、三年經つて生れたのがお釋迦樣である。

何故三年の間、腹の中にゐたかと云ふと、それは、妹に皇太子が出來たので姉の憍曇彌が非常に嫉妬んでこれを呪つたり、祈つたり、さまゞ〳〵にしてその出生を妨げやうとしたからである、然し佛樣の再來だと云ふのなら、如何なる天魔破旬も恐れるところは無い、早く生んだらよからうと抗議が出るかも知れないと思つて、そこはちやんと逃道をこしらへて置いた、姉夫人の呪咀調伏にまかせて出産の期を延ばしたのは即ち佛勅で、憍曇彌の惡念消滅の日を待ち大道心の善女とする所謂方便であつたと云ふ。

そのためか、太子が生れると、さしもの惡念に滿ちた憍曇彌夫人も本來の善心に歸つて前非を後悔し、妹にかはつて太子を守り育てたのである――と傳説にあるが、元來、三年胎内にゐたの、脇腹から生れたの、何のかのと、それはみんな佛樣を豪く見せやうとする未世の坊主の魂から出來た物語で、基督でも、孔子でも、日本では日蓮でも、空海でも、みんな勿體らしい夢物語、靈驗物語は付物のやうになつてゐるから、ひとりお釋迦樣ばかりは攻められ無い譯である。

子供の釋迦の出精成道も見ず、紅顔うら若くして死んだ此の薄命の摩耶夫人は、然しながら、自分の子の悉達太子が佛樣になつたおかげで、天上の仙女と生れ、帝釋天の皇妃となつた、帝釋天といへば三十三天の大王、四天王や五大明王を手足の如く